

(資料)

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料(1)」

広* 瀬 貞 三

はじめに

戦前において三菱鉱業が経営した佐渡鉱山には多くの朝鮮人労働者が強制連行され、金、銅等の採掘活動に従事した。これに関する学術研究として、次の四名のものがある。

- 1・広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者(1939～1945)」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』三号(二〇〇〇年三月)(以下、「広瀬論文」とする) 一～二九頁。
- 2・責任研究員チョン・ヘギョン(鄭恵瓊)『日本地域の炭鉱鉱山における朝鮮人強制連行動員の実態―三菱鉱山(株)佐渡鉱山を中心に』(韓国・日帝強制動員被害者支援財団、二〇一九年)(朝鮮語)

「広瀬論文」の誤りを指摘し、さらに新しい史料を追加している。一九九一年に所在が知られた相愛寮煙草配給台帳（朝鮮人名簿）を収集し、分析している点が大きな成果である。

3・責任研究員チョン・ヘギョン『日本地域の炭鉱鉱山における朝鮮人強制連行動員の実態―三菱鉱山（株）佐渡鉱山を中心に』（韓国・日帝強制動員被害者支援財団、二〇二二年）。前書の日本語版。全一七九頁。日本語訳校訂は竹内康人、広瀬貞三。（以下、『チョン・ヘギョン報告書』とする）。読者の便宜を考え、引用する場合は日本語訳を使用する。

4・チョン・ヘギョン「資料を通して見た「佐渡鉱山」強制動員の実態」、『日本世界遺産登載推進「佐渡鉱山」強制動員の歴史歪曲』シンポジウム（日帝強制動員被害者支援財団、二〇二二年一月二七日）報告レジュメ（朝鮮語）（以下、「チョン・ヘギョン論文1」とする）

先に刊行した『チョン・ヘギョン報告書』の内容を要約して、紹介した。

5・チョン・ヘギョン「名前を記憶せよ―三菱佐渡鉱山朝鮮人強制動員」、「日本の佐渡鉱山世界遺産登載強行による対応と展望」シンポジウム（韓国・東北亜歴史財団、二〇二二年二月一六日）（報告レジュメ）（朝鮮語）（以下、「チョン・ヘギョン論文2」とする）

チョン・ヘギョンは佐渡鉱山における朝鮮人労働者の名簿を分析し、被害者の人権回復を主張した。

6・キム・ミンチョル（金敏喆）「佐渡鉱山と朝鮮人強制動員に関する調査報告書」強制動員真相究明ネットワーク（<http://www.ksycjp/sinsou-net/>）（二〇二二年）。韓国での強制動員被害者認定関連資料（一四七名分）から一部を引用している点が特に注目される。（以下、「キム・ミンチョル報告書」とする）一―二二頁。

7・竹内康人「佐渡鉱山の朝鮮人強制労働、その否定論を問う」『RAIK通信』（在日韓国人問題研究所）一八八号（二〇二二年二月二五日）（以下、「竹内論文1」とする）二―五頁。

一部で最近関心を集めている平井栄一『佐渡鉱山史』を分析している。

8・竹内康人「佐渡鉱山での朝鮮人強制労働―強制労働否定論批判」(強制動員真相究明ネットワーク主催、二〇二二年二月二七日)報告レジュメ(以下、「竹内論文2」とする)

竹内は新潟の市民団体による調査資料を取集し、行政・企業側史料と照合した。

佐渡鉱山の朝鮮人労働者の実態解明は本来、学術研究レベルの問題であり、研究者間の活発な議論で進められるべきである。この四名の研究は先行研究を批判した後、新しい史料を発掘し、独自の視点から研究を進展させている。しかし、近年の佐渡鉱山の世界遺産登録に関し、学術的な研究に依拠しない不正確な情報が大量に流布している。さらに、この問題が日本・韓国両国政府の政治問題にまで拡大しているため、逆に政治的な立場から史実に基づかない発言までなされている。しかし、学術研究は先行研究を十分に消化し、さらに良質の史料に基づいて行わなければならない。

このため、私は朝鮮人労働者、佐渡鉱山、三菱鉱業について、先行研究である「広瀬論文」、「チョン・ヘギョン報告書」、「チョン・ヘギョン論文1」、「チョン・ヘギョン論文2」、「キム・ミンチオル報告書」、「竹内論文1」、「竹内論文2」で簡単に言及されたか、あるいはまだ全く使用されていない史料を九種類(一次史料は三種類、二次史料は六種類)紹介する。基本的な史料を広く公開して、活発な議論の共通認識とするためである。特に先行研究でほとんど言及されてこなかった三菱鉱業本店労務部の役割を視野に含めた。まず、項目ごとに史料の解題を述べ、次にその史料を紹介する。本稿によって、この問題への正確な理解を深める一助としたい。

一・加藤長吉「産金に就て」、司法省調査部『世態調査資料』第二〇号（一九三九年九月）

〔解題〕

加藤長吉「産金に就て」は表紙には㊦と印刷され、その下に㊧の判子を押されている。前半部は加藤の講演で、後半部は新潟地方裁判所一四名、新潟地方裁判所検事八名との質疑応答である。全二六頁で、巻末に「佐渡鉱山事業系統図」が四枚添付されている。『世態調査資料』は一九三六年一月から各地の裁判所（横浜、浦和、千葉等）が各業種の実態を担当者に講演してもらい、質疑応答をしてそれを小冊子にまとめたものである。

加藤長吉は一九三七年二月から佐渡鉱業所の鉱山長（最高責任者）である。一九一三年に東京帝大工科大学採鉱及冶金学科を卒業し、三菱鉱業に入社した。一時期、三菱鉱業技術部副長を務める。²

この史料は朝鮮人強制連行直前の佐渡鉱業所の実態がよくわかる。注目されるのは、次の四点である。第一に、労働者の数と募集方法に関する点である。第二に、従業員の職種が明記されている点である。第三に、賃金の詳細が明記されている点である。第四に、福利・厚生等が明記されている点である。ただこれらは会社側の主張であり、これが実際に運営されていたかは検証が必要である。また、日本人を対象にしたこの各種規定が、強制連行された朝鮮人に適用されたかも検証が必要である。

〔史料〕

・「従業員は鑿岩夫、坑夫、支柱夫、運搬夫、搗鉱夫、青化夫、製鉱夫、工作夫、電気夫等ありまして、大体其の名の示す様な仕事を担当して居りまして、その大部分は佐渡郡内出身者です。此の労働者を主体として協和会を組織し之が本体となつて教化救済、慰安等を行つて居ります。尚保健衛生に関しては健康保険組合を組織して病氣負傷等の際医療救済等に努力して居ります。他に在郷軍人分会、青年団、女子青年団等があります。賃金の支払法は請負法と定賃金とに分れ、請負法は主として採鉱方面に実施して居ります。」³

問「従業員の出身地は如何でせうか。

答「従業員の大多数は新潟県殊に佐渡郡内のもので、他府県人は僅かに百六十人程度に過ぎませぬ。

問「従業員の採用資格はどうでせうか。

答「佐渡鉦山従業員内と言ふものを印刷して、之を各町村役場に配布して置きます。採用資格と申しまして、坑内従業員は十六歳以上四十歳未満、坑外従業員は四十五歳未満と定めてあります。そして鉦山医局に於て身体検査を為し、合格せるものを採用します。女は坑内に従業員は致させません。(中略)

問「就業時間の制度はどうなつて居りますか。

答「坑内の従業員常一番組と二交替制、三交替制とあり昼夜間作業を致します。其の内鑿岩夫は二交替制で勤務時間は八時間、支柱夫及び運搬夫は三交替制で勤務時間は八時間乃至九時間です。坑外夫中製練夫は常一番組の十時間と二交替制の十二時間がありますが、此の二交替制は余り例はありません。大体は常一番組の十時間勤務であります。

問「授業員に対する給与状況は如何ですか。

答「従業員の本年(一九三九)一月分の実収入を申しますと、坑内夫は請負で本年一月分の実績を申上ぐれば左の通りです。

鑿岩夫(一日)	最高	三、九十円	最低	一、七九円	平均	二、六〇円
坑夫(手掘)	最高	一、八九円	最低	一、六五円	平均	一、七六円
支柱夫	最高	二、二〇円	最低	一、〇二円	平均	一、七八円
運搬夫	最高	二、三三円	最低	一、一五円	平均	一、六一円

右の外に臨時手当一日金三十銭、尚精勤賞として坑内夫は一日拾銭乃至二十五銭を給与して居ります。坑内夫は其の仕事によつて額が違います。精勤賞は可成休まずに働く様にとの奨励金であります。」

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉦山、三菱鉦山の史料(一)」(広瀬)

問「従業員の宿舍別如何。

答「下宿百五〇人、寄宿二八〇人、其の他は家庭よりの通勤者であります。

問「従業員の休養日の有無、娯楽、修養並衛生設備はどんなのがありますか。

答「公休は一ヶ月二回の定めになつて居りますが、現在のは月四回宛休ませて居ます。大体日曜日ですが、仕事の忙しい時には日曜の前後に繰上げ若くは繰下げて休ませます。四大節は勿論休ませて居ります。それで大体一ヶ月に二十六日位仕事が出る訳であります。

娯楽、修養に関しては協和会が主体となつて映画、演劇、浪花節等を年数回従業員並其の家族に無料で公開して居り、協和倶楽部にはラヂオ、囲碁、将棋、撞球、卓球台等の設備がありますし、尚其の外に運動会、遠足会等を催して居ります。修養機関としては協和会の修養日並前述の報徳会があり、其の外に在郷軍人会、青年団、女子青年団等の各種団体がありますことは前述の通りであります。衛生設備としては鉾山病院があります。尚健康保険組合がありまして、病氣傷病等の際療養救済の便を計つて居ります。」

二・「佐渡鉾山」、日本鉾山協会『半島人労務者二関スル調査報告』（同会、一九四〇年）

〔解題〕

日本鉾山協会が『日本鉾山協会資料』第七八号として刊行したものである。表紙には「秘抜」との印があり、緒言では「会員外ニ公表スルハ妥当ナラサルモノト認ムルニ付取扱上注意セラレムコトヲ望ム」とある。『日本鉾山協会資料』は一九二八年から一九四二年の八五号までが確認できるが、正確な最終号は不明である。

七八輯の『半島人労務者二関スル調査報告』（以下、『調査報告』とする）は全国を「札幌管内、大管内、福岡管内」と三分し、

それぞれ管内の鉱山、炭鉱の実態が書かれている。歌志内炭鉱から佐賀関鉱山まで、全部で七八カ所の炭鉱、鉱山における朝鮮人の現状が対象である。質問事項は全て同じなので、日本鉱山協会が傘下の会社を対象に調査をしたものだろう。

「一七佐渡鉱山」とあり、目次は、「(一) 指導訓育施設に関する事項、(二) 待遇に関する事項、(三) 送金及貯金状況、(四) 紛擾、争議ありたる場合其の原因乃措置、(五) 不良労働者に対する援取、(六) 半島人は如何なる作業に適するやに就きての感想」と六項目からなっている。鉱山協会としては、(四) (五) (六) への関心が強かったように思われる。

『調査報告』が刊行されたのは、一九四〇年二月なので、朝鮮人強制連行の初期の段階である。(一)「指導訓育施設に関する事項」では、「1・内鮮融和方法、2・作業及保安に関する講習、3・稼働成績、4・衛生思想の普及」が書かれている。これが最も重要な部分だった。(二)「待遇に関する事項」では、「1・賃金の定め方、2・平均一ヶ月の実収入、3・稼働奨励方法、4・生活の補助方法、5・社宅の給与、6・寄宿舎の食事、寝具、入浴等に関する事項、7・公課の負荷方法、8・奨約期間、9・娯楽及慰安、10・福利施設の概要、11・災害に対する扶助方法」が詳細に語られている。しかし、朝鮮人労働者にとってこれらの条件が実際に守られたのかは検証が必要である。

(四)では『特高月報』にあるように、一九四〇年四月一日に朝鮮人労働者九七名が「賃金値上を要求し罷業を断行」したところへの弁明が書いてある。佐渡鉱業所自らの反省は一点もない。(五)では抵抗する朝鮮人を「不良労働者」とみなし、徹底した監視、さらには朝鮮への帰還を実施している。(六)は朝鮮人への差別意識が示されている。

〔史料〕

① 「(一) 指導訓練施設に関する事項

1 内鮮融和方法

(イ) 着山に際し内地人代表労働者の出迎並会食懇談会等に依り交歓せしむ。

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料(一)」(広瀬)

(ロ) 山神社参拝の上故郷に対し無事着山報告式を挙行、敬神崇祖の觀念を涵養す。

(ニ) ^{ママ} 内鮮協調融和の必要、日常生活の改善、向上等に関し懇切に説明訓育し内地的生活に誘導す。

(三) 作業用品取扱並に就業に関し、親心を以て指導せしむる様係員並指導内地人勞務係の教育を爲す。

(ホ) 新潟県内鮮協和会佐渡支部に入会せしむ。

(ヘ) 補導学級を設け三ヶ月間内地語の教育訓練を行ふ。

2 作業及保安に関する講習

(イ) 補導期間中屢々講習会を開催し、保安意識の徹底を計る外、就業前係員より種々操業上の注意を与へ、国民体操等を指導す。

(ロ) 特に就業現場を設けて一組数名に分ち、内鮮語を能くする半島人一名宛を加へ之に古參勞務者を選定、配置し、直接專念指導に当らしむ。

(中略)

(四) 紛擾、争議ありたる場合其の原因及措置

原因

当方に於ては去四月半島人の不就業を見たる事例あれども、その原因は、一部勞働者の誤解齟齬に基く偶発的事故にして、紛議の結果より考察するに

一・言語が通ぜざる為に生じた誤解

一・智能理解の程度が想像以上に低き為意思疎通を欠きたること

一・募集現地の郡面関係者が、坑内作業内容の認識を欠きたる点多かりし為、労働条件等に多少の誤解ありたること

一・二三不良分子の扇動に乘じ半島人特有の狡猾性付和雷同性を現したること

等に要約さる。

処置

地元警察と連絡し不良分子の検束拘留を為すと共に、性行面白からずと目さるゝ者の即時解雇、国元送還等断乎たる処置を執れり。

(五) 不良労働者に対する扱取

不良労働者に対しては日当査察を厳にするは勿論、之が他衆に及ぼす影響等考慮、警察と緊密なる連絡を取り嚴重説諭訓戒を為し、固く将来を戒めつ、指導し居るも、悪質者に対しては国元送還を為しつゝあり。狡猾雷同性あるに依り、日常公私の生活に対し所謂「手綱」をゆるめざる管理を必要とす。

(六) 半島人は如何なる作業に適するやに就きての感想

性来鈍重にして技能的才能極めて低く、且つ研究心等皆無なれば、力業を主とする坑内運搬夫等の業務に適すべく、その中特に優秀なる者のみ充分訓練指導の上技能工として使用すべく努力中なり。」

三・相川町史編纂委員会編『佐渡相川郷土史事典』（同町、二〇〇二年）の「平井栄一」、「佐渡鉦山史」の項目

〔解題〕

二〇〇二年九月時点における平井栄一、彼が編纂した『佐渡鉦山史・佐渡市版』（以下、『佐渡市版』とする）に関するコンパクトな情報である。これは『佐渡相川の歴史』別冊である。しかし、当時はこれらにはほとんど関心が寄せられなかった。

平井の経歴について、二つの点を追加する。平井には二つの論文がある。第一に、「石英粗面岩と新規金鉦脈に就いての考察」『日本鉱業会誌』五八卷六八七号（一九四二年七月）である。肩書は三菱鉱業尾去沢鉦業所である。「筆者は佐渡鉦山に永年勤務し、

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉦山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

実際に目撃したものを基礎とし考察を進めつゝあつた、「採鉱技術者の本領として」とある。¹⁰⁾

第二に、「鉱脈の形態概念と探鉱私見」『日本鉱業会誌』六四卷七八号（一九四八年七月九月）である。肩書は三菱鉱業尾去沢鉱業所参事である。¹¹⁾つまり、平井は佐渡鉱山に長く勤務した後、一九四二年七月時点では尾去沢鉱業所に在籍し、一九四八年九月時点では同所の参事だったことがわかる。

平井栄一『佐渡鉱山史』の前半部分（江戸時代）を著書『佐渡金銀山史話』に使用したと思われる麓三郎（一八九三〜？）の経歴は次の通りである。旧制東京高等商業学校卒業、同校専門部卒業。一九二七年三菱合資会社に入社した。三菱鉱業の海外部長、人事部長、総務部長、監査役（一九五〇年四月〜一九五三年五月）を歴任した。

著書・翻訳・論文に、レヴィンスキー『経済学を建設せし人々』（翻訳）（欽文堂、一九二四年）、「伝記・船田一雄」船田一雄氏記念刊行会『船田一雄』（同会、一九五三年）、『佐渡金銀山史話』（三菱金属鉱業、一九五六年）、『三菱飯塚炭鉱史』（三菱鉱業、一九六一年）、『尾去沢・白根鉱山史―近世銅鉱業史の研究』（勁草書房、一九六四年）、『小岩井農場七十年史』（小岩井農牧、一九六八年）、「先立ち人を慕いて」伊藤保彦・福井純一編『追想伊藤保次郎』（同人、一九七三年）、『三菱セメント株式会社総務部社史編纂室編『三菱鉱業社史』（共著）（同社、一九七六年）がある。¹²⁾

特に重要なのは『三菱鉱業社史』の編纂に嘱託として参加し、四名の執筆者の一名となった点である。残り三名（森川英正、小林正彬、高浦忠彦）は経営史、経済史の研究者だったのに対し、麓は三菱鉱業を代表しており、しかも三菱鉱業の全体像を語れる社員だった。¹³⁾いわば現在の三菱鉱業の歴史像と対外的な印象を形成する上で、重要な役割を果たしたといえる。

麓もみずから平井の『佐渡鉱山史』との関係について、「平井氏の稿が成ったが、同氏は専ら技術的立場から筆を執られたので、羽仁（路之）社長はさらに一般の読み物にも適するものを書いてみてはどうかと筆者に勧められた」と語っている。¹⁴⁾

また、『佐渡鉱山史』のコピーを麓三郎から借りて、一九八九年に相川町史編纂室へ寄贈した大場四千男（一九四三〜）の経歴

は次の通りである。大場は経営学者であり、二〇〇二年に法政大学から博士学位（経済学）を授与された。一九七〇年に北海学園大学経済学部講師となる。助教授、教授を歴任し、二〇一四年三月に定年退職した。著書一冊、論文百編以上がある。研究分野は大きく二つに分かれる。第一に英米の経済史、経営史であり、第二は日本経営史である。後者は、戦時経済と企業経営、石炭鉱業史、初期の北海道の経済からなる。¹⁵

〔史料〕

① 「平井栄一 一八九五—一九五六 佐渡鉱山採鉱課長、相川町立郷土博物館初代館長。明治二十八年四月相川町に生まれた。鉱山に勤務したのは大正の初めころと思われる。昭和十一年ごろ、北海道余市郡の三菱鉱業手稲山鉱山の中ノ沢支山に転出し、尾去沢鉱山（秋田）などを経て、のち再び佐渡に帰って、採鉱課長（技師）を最後に退職した。鉱山の技術部門の歴史にくわしく、また文化にも関心を持っていて、「明治時代に於ける佐渡鉱山の文化的事績」「佐渡に於ける陶磁の歴史」「相川郷の地学的雑感」など、多くの論考を残している。昭和三十一年七月、町立博物館の創立に森三郎らとかわり、初代館長を勤めたほか、町教育委員長・三菱金属鉱業株式会社参事なども務めた。温厚な人柄で、昭和三十一年九月六日、六一歳で没した。遺稿として『佐渡鉱山史』（稿本）を残している。」¹⁶

② 「佐渡鉱山史 元佐渡鉱山採鉱課長の平井栄一の編著。まだ未公開で、稿本のまま相川町史編纂室に保管されている。ただしコピーで、原本の所在はわからない。内容の一部は、昭和三十一年（一九五六）八月発行の『佐渡金銀山史話』（麓三郎著、三菱金属鉱業発行）に「旧幕時代の鉱山技術」「佐渡の金銀山産出量に就いて」の二章が収録されている。同三菱金属の羽仁路之元社長の回想によると、社長在任中に佐渡鉱山の変遷と興亡の跡を、まとめて後代への記念にしたいと考え、永年佐渡鉱山に在勤した平井に起草を頼んだ。昭和二十五年に完成したが、技術方面や統計資料が多かったので、さらにこれを一般読物にしたいと考え、生野鉱山史などの著作で造詣が深かった麓三郎（三菱鉱業監査役）に依頼した、という。同書に一部収録さ

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三四九

れたのは、平井の草稿の江戸時代に関する記述で、明治・大正・昭和にわたる部分は、スペースの関係で除かれた。明治初期の金銀貨幣問題、三菱への払下顛末、三菱移管後の佐渡鉱山精煉法、課制および所属人員と施設の概要、鉱夫親方制度の来歴などのほか、大正から昭和時代の採掘法の沿革、労働争議と労務係の新設、浮遊選鉱場の建設、近年に於ける探鉱・採鉱の状況など、かなりくわしく綴られていて、技術・経営史としてとりわけ貴重である。この草稿は、そのコピーが昭和五十一年一月に、麓三郎から北海学園大学（札幌）の大場四千男教授の手に渡り、平成元年に相川町史編纂室に寄贈された。¹⁷

四・平井栄一『佐渡鉱山史』

〔解題〕

この史料は近年、佐渡鉱山における朝鮮人労働者の実態を示す一次史料として関心を集め、一部はすでに公開されている。執筆者の平井栄一の経歴、『佐渡市版』は三章の史料で紹介した。

この史料の全貌が明らかになる過程には私も関連しているので、その経緯を書いておく。

(1) 二〇〇〇年初頭、平井栄一『佐渡鉱山史』は新潟県立図書館に所蔵されていた。私は論文を準備中だったので閲覧を申請するが、「寄託者（ゴールドデン佐渡）の意向」で非公開だった。このため、論文では使用できなかった。¹⁸

(2) 相川町史編纂委員会編『佐渡相川郷土史事典』（同町、二〇〇二年）が刊行される。三章で述べたように、「平井栄一」、「佐渡鉱山史」の二項目がある。これによって平井栄一『佐渡市版』の存在が明らかになった。

(3) 二〇一〇年三月から二〇一五年三月にかけて、平井栄一『佐渡市版』の全文が活字として、『佐渡金銀山の歴史的価値に関する歴史的・史料学的研究』等（全六冊）（二〇一〇～二〇一五年）の内、一～五冊に掲載された。報告書は各機関や大学に多数送付された。福岡大学考古学研究室にも送付されていた。

正式名称は六冊の内、最初の二冊は『佐渡金銀山の歴史的価値に関する歴史学的・史料学的研究』であり、次の四冊は『近代の佐渡金銀山の歴史的価値に関する研究』である（以下、両者をあわせて『研究』とする。また、号数がないので、便宜上「一六号とする」）。

『研究』は新潟県庁からお茶の水女子大学が研究の委託を受け、小風秀雅（同大学教授）が編集・発行した。小風は二〇二二年三月現在、立正大学教授であり、お茶の水女子大学名誉教授でもある。日本近代史専攻で、『帝国主義下の日本海運―国際競争と対外自立』（吉川弘文館、一九九五年）、編著『日本の時代史23・アジアの帝国国家』（吉川弘文館、二〇〇四年）、編著『日本近現代史』（放送大学教育振興会、二〇〇九年）等の著書がある。『研究』一号の刊行時はお茶の水女子大学に在職中だった。小風は新潟県・佐渡金銀山世界文化遺産学術委員会委員長（二〇一〇～）を務めている。

『研究』一号には『佐渡市版』に関する小風と余湖明彦（新潟県教育庁文化行政課世界遺産記録推進室主任調査員）（以下、「推進室」とする）の解題がある。それによれば、この『佐渡市版』は佐渡市立相川郷土博物館、三菱史料館に所蔵されている。両者を比較検討したところ、原文への加筆・修正から見ても、同一物のコピーであると断定した。これ以外の所蔵先は不明で、また現物の所在も不明だった。活字化の原本は『佐渡市版』を利用している。『佐渡鉱山史』は全九四五頁であり、この時点で明治期以降の五二六頁（全体の五五・七％）が広く公開された。¹⁹

（4）二〇一三年二月、内藤隆雄が平井栄一『佐渡市版』を使用した論文「明治期佐渡鉱山の製練部門における技術導入」『経済学研究』（北海道大学）六二巻三号（二〇一三年二月）を刊行する。内藤は日本経済史専攻で、当時は北海道大学経済学部准教授で、現在は東京経済大学経済学部教授である。内藤は前述した小風秀雅チームの一員で、『研究』に多くの論文、報告を掲載している。（5）二〇一五年八月、「推進室」から私に、「佐渡鉱山での朝鮮人労働者の新しい史料が見つかった。内容を確認して欲しい」との依頼がある。「推進室」から私に『佐渡市版』全文のコピーが送られてくる。平井栄一『佐渡市版』であることを確認する。

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

表紙には「平井栄一稿 佐渡鉱山史 昭和二十五年 大平鉱業（旧三菱鉱業）佐渡鉱業所」と手書きで書かれている。タイプ印刷で、下に通し番号が打たれている。三章の史料で述べたように、第一回～第二回は欠落しており、明治以降の一三回～二四回分のコピーである。注目されるのは朝鮮人労働者に関する八四五頁が欠落している点である。内容は主に三菱鉱業本店に提出する「事業報告書」等を中心にとまとめたようであるが、未整理の段階である。しかし、近代の佐渡鉱山の経営を知る上では一級資料である。

私はこの時に『佐渡市版』の全文を読む。朝鮮人労働者について述べているのは、「(九) 朝鮮労働者事情」と「(十) 敗戦後の操業状態」のわずか三頁（八四五、八四六、八四八頁）に過ぎず、しかもその一枚（八四五頁）が欠落している。朝鮮人労働者に関する新しい記述は極めて少ない。一本の新しい論文を書く史料としては分量が不足しているので、そのまま放置する。

(6) 二〇二二年一〇月一六日、「推進室」から私に『報告』六冊が送ってくる。私が『佐渡市版』の現在の所蔵機関を質問したところ、「すでに『報告』五冊に『佐渡市版』の全文を活字化した。『報告』六冊の残部があるので送付する」とのことだった。私はこの時点で初めて、『佐渡市版』の全文が活字化されたことを知る。

(7) 二〇二二年一〇月二三日、私は第一回強制動員ZOOM講座で「佐渡鉱山と朝鮮人労働者+新史料」（強制動員真相究明ネットワーク主催）を報告する。二〇一五年八月に入手した平井栄一『佐渡市版』を紹介する。

(8) 二〇二二年一月二七日、韓国でシンポジウム「日本世界遺産登載推進「佐渡鉱山」の強制動員歴史歪曲」（日帝強制動員被害者支援財団主催）が開催される。チョン・ヘギョン（日帝強制動員平和研究会代表研究委員）が、「資料を通して見た「佐渡鉱山」朝鮮人強制動員の実態」を報告する。報告の最後に、『佐渡市版』を紹介する。韓国で『佐渡市版』の存在が初めて知られる。

(9) 二〇二二年一月三十一日、歴史問題認識研究会（西岡力会長）が「平井栄一編『佐渡鉱山史・其二』の目次、八四四～八四六頁の写真版を入手した」（以下、これを『研究会版』とする）とホームページで伝え、写真三枚を公開した。前述したように、こ

れまで知られていた『佐渡市版』では朝鮮人労働者に関する部分の八四五頁が欠落していた。このため、この部分の空白を埋める『研究会版』の公開は西岡の功績である。

しかし、西岡は歴史学者ではないので、史料に対する取り扱いが杜撰である。第一に『研究会版』の写真をどこから入手したのかを明らかにしていない。新史料が発見される場合、その所蔵先が重要である。公表できない理由があるのだろうか。第二に一般的に史料は単独ではなく、史料群として発見されることが多い。これ以外に佐渡鉱山に関連する史料があったのかどうかを明らかにしていない。第三にこれまでもすでに知られていた『佐渡市版』との校訂を行っていない。

歴史学研究では新史料を発掘して公開する時は、新史料の全てを熟読し、先行史料や先行研究を十分に調査して、その新史料を総合的に評価する。しかし、西岡はその基本的な作業を行っていないので、三つの誤りを犯している。第一に、原文は非公開でどこかに保管されているかもしれないが、前述したように『佐渡市版』は非公開ではなく、すでに二〇一〇年三月から二〇一四年三月にかけて全文が活字化され、『報告』六冊は各機関に多数送られている。これを使って、二〇一三年二月には研究論文すら刊行されている。このことを知らない。第二に『佐渡市版』で八四六頁は公開されているが、八四五頁が欠落していることを知らない。第三に朝鮮人労働者に関する記述が八四八頁にもあることも知らない。

私は所蔵する『佐渡市版』と『研究会版』の校訂を行い、文字や体裁から同一文書であることを確認した。一点異なるのは『研究会版』は下部に手書きのページ数が書かれているのに対し、『佐渡市版』は下部にナンバリングでページ数を打ってあることである。西岡は「佐渡鉱山が朝鮮人強制労働の現場ではないことを示す一次史料・平井栄一編『佐渡鉱山史』」と主張しているが、これは史料の誤読、あるいは曲解である。その理由は後で述べる。²⁰

公開されていた『佐渡市版』では、すでに次の点が明らかになっていた。第一に、連行された朝鮮人の数である。これまでは朝鮮人労働者数は昭和十五年六四八名（二月に九八名、五月に二四八名、十二月に三〇〇名）、昭和十六年二八〇名、昭和十七年

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三三三

七九名、合計一〇五五名が知られていた。²¹これに加え、「昭和十九年、二十年度において朝鮮人労務者増加数五一四人に上り、圧倒的労働者であった」と書かれてあり、連行された朝鮮人数は一〇〇五名ではなく、一五一九名であることが史料上は確定していた。

第二に、敗戦直前の佐渡鉱山坑内労働の民族別の実態である。私はさきに一九四三年八月時点における民族別職種を上げ、鑿岩夫（朝鮮人八二％、日本人一八％）、運搬夫（朝鮮人七八・六％、日本人二一・四％）、支柱夫（朝鮮人五八・九％、日本人四一・二％）と書いていた。²³『佐渡市版』では「佐渡鉱山は敗戦と同時に朝鮮労働者全部を送還し、少数の内地労働者に依存するに至りしが、既述の如く朝鮮労働者は殆んど全部が坑内関係作業に従事し、鑿岩作業の如く相当熟練者を有せしが、其一斉帰国によつて坑内作業は大打撃を受け、出鉱急遽減少し、為に選鉱作業も甚だ不十分ならざるを得ず。労務配置の均衡著しく失はれて徒らに生産を阻害し、極度の経営難に陥つた」と書いている。つまり、一九四三年八月以降は坑内労働を朝鮮人に依存する比率がさらに高まり、敗戦直前には朝鮮人は「殆んど全部」坑内作業に従事していたことが明らかになった。これによって、朝鮮人労働者は坑内労働の危険度、珪肺の感染度がさらに高まっていたのである。

今回の『研究会版』公開の意義は、『佐渡市版』で欠落していた八四五頁が明らかになった点である。私は西岡の見解と違い、『研究会版』の朝鮮人労働者に関する史料的重要性は、次の三点にあるとみる。

第一に、『研究会版』で初めて「昭和一九年二六三名、昭和二〇年二五一名 計一五一九名」と、年度別の数が明らかになった点である。おそらく一九四四年、一九四五年に佐渡鉱山へ連行された朝鮮人五一四名についても、佐渡鉱業所「半島労務管理ニ就テ」²⁴のような形式で、連行月と人数、出身道・郡、減員数（死亡、逃走、公傷送還、私傷送還、不良送還、一時帰鮮^マ、転出^マ）等が書かれた史料が佐渡鉱業所に残っていたと思われる。平井はその史料を利用したのだろう。

第二に、これまで『佐渡市版』で八四五頁が欠落していた理由が不明だった。今回初めて『研究会版』でこの部分が公開され、

その理由がわかった。平井栄一による稿本が完成した一九五〇年以降に『研究会版』を読んだだけだが、あるいはある機関が強制連行した朝鮮人労働者の総数二五一九名とその年度別の数を隠蔽したかったために、『佐渡市版』をコピーする際、八四五頁を除いたのであろう。

第三に、佐渡鉱山からの「終戦時の送還一〇九六名」が明らかになった点である。私は「最終的には佐渡鉱業所の朝鮮人は日本での永住を希望する数名を除いて、一九四一年一〇月から二月にかけて全員帰国した」と書いていた。²⁵朝鮮人の連行数は一五一九名、帰還者数は一〇九六名である。この差の四二三名の実態を解明することも今後の課題である。

では西岡が「佐渡鉱山は朝鮮人強制労働の場ではなかった」と主張している他の部分をどのように見るべきか。『研究会版』の八四五頁、『佐渡市版』の八四六頁の「在山中の待遇、賃金制度、稼働奨励方法等概ね内地労働者と同じ」以下の部分である。平井はこの部分では佐渡鉱業所「半島労務管理ニ付テ」（一九四三年六月）をほとんど引用している。原文はすでに『在日朝鮮人史研究』一二号（一九八三年九月）に全文掲載しており、私はこの史料を論文で引用している。²⁶

ここでは二つの文書（佐渡鉱業所「半島労務管理ニ付テ」と『研究会版』）の一部分だけを比較してみよう。

「家族持労務者ニハ社宅ノ無料貸与、共同浴場施設、米、味噌、醤油、其他生活必需品ノ廉価配給（直営ノ購買会）及び家族傷病ノ場合ノ診察（直営ノ医局）等を実施。単身者ハ寄宿舎（相愛寮 三ヶ所ニ収容シ、舎費ハ徴収セズ。」（「半島労務管理ニ付テ」）。²⁷

「家族持労務者には社宅の無料貸与、共同浴場施設、米、味噌、醤油、其他生活必需品は購買会にて廉価配給、及び家族傷病の場合の診察等を実施し、単身者は寄宿舎（三個所）に収容し、舎費を徴せず。」（『研究会版』）²⁸

詳細に見ると、平井は「半島労務管理ニ付テ」の「四・福利厚生施設ノ概要」から会社側に有利な部分を主に引用している。しかし、平井は「契約期間更改訂ノ有効方策」で、「募集契約」が終了した後も、強制的に「兎モ角全員継続就労ノ事」としている

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三五五

部分にはふれていない。つまり、『研究会版』、『佐渡市版』は佐渡鉱業所「半島労務管理ニ付テ」の会社側に有利な部分を主に取り上げ、カタカナをひらがなに変え、文章を一部修正しているだけである。

さらに元史料の「半島労務管理ニ付テ」を読む時、次の二点に注意する必要がある。第一に、この文章は一九四三年六月二〇日、東京鉱山局・大日本産業報国会・東京地方鉱山会の主催下、佐渡鉱業所で開催された「朝鮮人労務管理研究協議会」で佐渡鉱山が配布した文書である。このような場合、自社の否定的な側面を描いた文章を公表するであろうか。一定の史料批判が必要である。

第二に、全体の文章構成を見るとき、目次を見ると、「一・管理方針、二・管理ノ現況、三・賃金支払及計算ノ方法、四・福利厚生施設ノ概要、五・給与規正（食糧等）ニ関スル問題、六・契約改定ノ有効方策」の順である。最初に出てくる「一・管理方針」の中の項目は、「イ・一般的取扱方、ロ・待遇、ハ・逃亡防止」である。

「ロ・待遇」では「内地人ト同様ナルモ寮、社宅等ニ付キ充分ナル施設ヲナス半面、「与ヘルモノハ与ヘ縮メル所ハ縮メル」ノ行キ方ヲ以テ之ニ当リ、特ニ勤務状況、性向等不良ナル者ニ対シテハ、相当嚴重ナル態度ニテ臨ミ、賞罰ヲ明ニスル事ト致シ居ル」²⁹という。佐渡鉱業所は「縮メル所ハ縮メル」、「性向等不良ナル者」〔反抗する者〕ニ対シテハ、相当嚴重ナル態度ニテ臨ミ、賞罰ヲ明ニスル事」を明記しており、これは朝鮮人労働者に対する労務管理の強化を意味するものであろう。

次の「ハ・逃亡防止」は「一・逃亡原因、二・防止意見」に分かれる。この部分はすでに私は論文で書いているので、³⁰ここではくり返さない。このように文書の冒頭部分に「逃亡防止」が出ていることは、佐渡鉱業所にとって朝鮮人労働者の逃亡防止策が大きな関心事だったことがわかる。

また、朝鮮人労働者の証言は佐渡鉱業所の主張を否定している。韓国政府は二〇〇四年に日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会を設置し、植民地期の被害者、家族から多くの申請を受け付け、関連資料を収集した。この時に作成された膨大なデータベースがあり、佐渡鉱山で働いた朝鮮人は一四七名が判明している。「キム・ミンチョル論文」はそれらの証言の一部を紹介している。

申○チヨルは「賃金は小遣い程度をいくらか受け取ったが、一番辛かったのは食事の量が少なく、空腹で一日一日が耐え難い辛さだったことだ。微用当時、労務者として二年契約を結んだが、戦争中だということで二年間延長することを強要された。一九四五年一二月に帰還した」。崔○カッブは「労働条件は、一日の給与として二円三〇銭を受け取っていたが、食事代、衣服、靴代を除けば、残るお金はなかった」。羅○ギは「金鉱で働いている途中、天井から岩が崩れ、一日に何人も人が死ぬなど、負傷者が多く、これ以上いたら命が危険であると感じ、一九四四年五月三日の明け方、金鉱から脱出した。連絡船に乗って、帰還した」。金○チュンは「一月に八円から三〇円まで受け取った。食事に一kmほど歩いて行かなくてはならず、睡眠は食堂の近くでとった。」等と語っている。³¹

さらに西岡は言及しないが、私は『特高月報』を使い、佐渡鉱山で二件の労働争議が発生し、五件の逃亡があったことを指摘している。³²これらは朝鮮人に対する差別的な待遇があったから発生したのである。

以上のことから、『研究会版』、『佐渡市版』の八四四～八四六頁は佐渡鉱業所が主張した内容にすぎず、西岡が主張するように「朝鮮人強制労働の現場ではなかったこと」を立証する史料とはいえない。³³

〔史料〕『研究会版』＋『佐渡市版』

・〔九〕朝鮮労務者事情

日支事変の拡大と共に鉱員の応召漸く増加し、増産計画遂行上困難を来し、内地求人絶対不可能の状態にありたれば、昭和十五年二月朝鮮人労務者九八名を募集し、五月二四八名、十二月三〇〇名、昭和十六年二八〇名、同十七年七九名、十九年二六三名、二十年二五一名、計一、五一九名を移入したが、終戦と同時に残留人員一、〇九六名を送還した。

在山中の待遇、賃金制度、稼働奨励方法等概ね内地労働者と同じで、主として坑内夫として就労し、請負単価により稼高に応じ賃金を支給し、一ヶ月の稼働成績に応じ精勤賞与を与へ、扶養家族の多寡及稼働日数に応じて米価補給を行ひ、毎年二回の勤労賞

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三三七

与を交付し、一般に家族持労務者には社宅の無料貸与、共同浴場施設、米、味噌、醤油其他生活必需品は購買会にて廉価配給及家族傷病の場合の診療等を実施し、単身者は寄宿舎（三個所）に収容し、舎費を徴せず。食料は内地人同様の調理にして、一日五十錢（実費の差額は会社負担）、寝具使用料一ヶ月一組五十錢にて貸与し、光熱費浴場費は会社負担、其他作業品、衣服、履物等日常品の購入払下は購買会を通じて廉価に行ひ、蔬菜類不足の折柄鉾山直営の農園から補給した。

尚又全従業員を以て組織せる協和会（当時産業報国会）に入会せしめ、従業員の親和、修養、救済、境遇改善、能率並に福祉増進を図る。協和会に於ては随時映画会、講演会、遠足会、運動会其他祭典催事を開催し、尚各寄宿舎には娛樂室を設け、雑誌、朝鮮将棋、蓄音機、ラジオ等を設け、慰安と趣味の向上に務むる等、遺憾なきを期した。

其他勤続三ヶ月以上に及びたる時は団体生命保険に加入せしめ、各人在籍中の保険料は一切会社負担し、万一不幸ありたる場合、保険金三百円を贈呈し、災害に対する扶助、退職の場合の給与関係等につき内鮮区別なく、移入当時は一人一日米一升程度を普通とし、漸次減食せしめ、特に配給米実施後は盛切り飯とし、配給米の特に不足を来せる場合は、甘藷、大根、乾麺等の混食にて間に合はせた。

昭和十八年五月に於ける職種別人員及び内地労働者との比率は左の如くである。

「表が入るが、煩雜なので省略する。佐渡鉱業所「半島労務管理二付テ」と同一である。」

昭和十九年、二十年度に於ては朝鮮人労務者増加数五一四人に上り、圧倒的労働者であつた。

概して訓練又は指導よろしきを得たる如く、終戦に際しても他地方に見るが如き暴状もなく、帰還せしむるを得た。³⁴

「(十) 敗戦後の操業状態

日支事変勃発以来九ヶ年、太平洋戦争進行三ヶ年未滿、原子爆彈の威力克く日本国土を支離裂開させるに十分であり、疲弊せる国民の戦闘意識を喪失させるに効果があつた。（中略）

翻つて佐渡鉱山は敗戦と同時に朝鮮労働者全部を送還し、少数の内地労働者に依存するに至りしが、既述の如く朝鮮労働者は殆んど全部が坑内関係作業に従事し、鑿岩作業の如く相当熟練者を有せしが、其一斉帰国によつて坑内作業は大打撃を受け、出鉱急遽減少し、為に選鉱作業も甚だ不十分ならざるを得ず。労務配置の均衡著しく失はれて徒らに生産を阻害し、極度の経営難に陥つた。³⁵」

五・三菱鉱業佐渡鉱業所の歴代鉱山長（一九三九～一九四五年）

〔解題〕

『三菱鉱業社史』に佐渡鉱業所の歴代鉱山長の氏名は出てこない。また、『佐渡市版』には鉱山長の名前は出てくるが、就任年月は書かれていない。このため、表1を史料におく。史料が不足しているために断定的なことは言えないが、帝国大学の卒業生（瓜生泰を含む）が七名おり、この内で工科大学卒業者が五名だったことがわかる。第八代加藤長吉以降の七名（高橋幸三郎、明石孝因、末綱磯吉、山内亀三郎、竹越熊三郎、緒方正喜）の鉱山長が朝鮮人労働者を使用した現場最高責任者である。

まず、第九代高橋幸三郎の詳細な経歴が明らかなので、これを見てみよう。東京帝大工科大学採鉱及冶金学科を卒業後、三菱鉱業に入社する。本店で鉱業研究所建設に従事した後、尾去沢鉱業所で選鉱係となる。一九二四年末、生野鉱山に転勤する。一九二六年に鉱業視察のため欧米に出張する。一九三〇年に本店技術部に移転する。横峰鉱山、細倉鉱山、佐渡鉱山の技術開発を行い、佐渡鉱山に関する研究論文「金銀浮選法に就いて」を一九三一年一月『日本鉱業会誌』六一九号に発表し、第一〇回渡辺賞を受賞する。朝鮮の茂山鉱山採掘のため、欧米に使節団が派遣され、一員として参加する。帰途、選鉱廃泥ダムの処理安全対策のため、ウイーン大学、ハーバード大学で研究する。帰国後、一九四一年六月佐渡鉱山長に就任し、探鉱に専念する。

太平洋戦争後、日本政府は鉱業界に「南方開拓のため産業団の組織」を命令し、三菱鉱業から高橋らが参加する。一九四二年五

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（1）」（広瀬）

三五九

表 1・佐渡鉱業所の鉱山長（1896～1945）

番号	氏 名	就任年月	学 歴	その後の経歴	三菱鉱業の 役職
1	徳弘 為章	1896 年 10 月			
2	原田 鎮治	1899 年 6 月	東京帝大工科大学採鉱及冶金学科	本店鉱山部長	
3	瓜生 泰	1902 年 4 月	大阪開成所、大学南校、東京大学	本店鉱山部副部長	
4	中本 英彦	1911 年 6 月	東京帝大工科大学採鉱及冶金学科	本店採鉱課長、 本店技師長	常務取締役
5	安川 昇一	1917 年 9 月	京都帝大工科大学採鉱冶金科	荒川鉱山長	
6	明石 素因	1926 年 11 月	東京帝大工科大学か？	本店技師長	常務取締役、 専務取締役
7	岩尾 行造	1933 年 9 月			取締役
8	加藤 長吉	1937 年 2 月	東京帝大工科大学採鉱及冶金学科		
9	高橋幸三郎	1941 年 6 月	東京帝大工科大学採鉱及冶金学科	本店鉱業研究所所長	常務取締役、 専務取締役
10	明石 素因	1942 年 3 月	東京帝大工科大学か？		
11	末綱 磯吉	1942 年 8 月			
12	山内亀三郎	1943 年 6 月	東京帝大法科大学政治科		
13	竹越熊三郎	1944 年 5 月			監査役、 取締役
14	緒方 正喜	1945 年 6 月			

相川町史編集委員会編『佐渡相川郷土事典』（同町、2002 年）329 頁、三菱鉱業セメント総務部社史編集室編『三菱鉱業社史』（同社、1976 年）、日本図書センター編『帝国大学出身人名事典』全 4 巻（同社、2003 年）等から作成。鉱山長のリストはゴールデン佐渡が相川町に提供した。

三六〇

月、客船で南方に向かう途中、潜水艦の魚雷が命中し、船は沈没し、九時間漂流し救出される。同年夏頃再度南方派遣の第二陣に参加し、フィリピンに赴任。滞在一年で帰国し、本店の鉱業研究所長に就任した。陸軍の命令で銅に代わる純鉄の砲弾用弾帯の製造に着手し、成功する。

敗戦後、大平鉱業（金属部門）の常務取締役となるが、戦犯追放に該当する。一九五〇年一〇月に追放は解除され、再び三菱鉱業に入社し、常務となる。一九五六年に常務を退任し、常任顧問となる。後に原子力公社の理事長になる。³⁶

高橋の経歴からは短期間での現場の頻繁な転勤が眼につく。また、行動範囲が日本だけでなく欧米、南方までも移動している点が特徴である。

ついで、第六代明石孝因の経歴が少しわかる。一八八六年、秋田県生まれ。一九一二年に東京帝大を卒業し、同年三菱鉱業に入社する。一九三七年時点で尾去沢鉱山長だった。³⁷一九二六年一月に佐渡

鉦山長に就任した。その後明石は本店に戻って、技術部技師長に就任する。明石は技師長のまま一九四二年三月に二回目の鉦山長となる。その理由は明確ではない。

三菱鉦業の場所（三菱鉦業では各事業所をこうよぶ）で、鉦山では鉦山長、副長、炭鉦では所長、副長の二人が最高責任者だった。初期の段階では二名とも技術者だったようである。池田亀三郎（一八八四―一九七七）は一九〇九年七月に東京帝大工科大学採鉱及冶金学科を卒業し、三菱合資会社石炭部に入社した。新入炭鉦の後、方城炭鉦に移動し坑内主任となった。一九一四年二月ここで大爆発が起こり、約七百名の労働者が死亡する大惨事が起きた。池田は一九一六年に相知炭鉦に副長として赴任し、翌一九一七年には大夕張炭鉦の鉦長^マとなった。³⁸

その後、鉦山長が技術者で、副長が事務職の組み合わせとなったようである。もちろん例外もあっただろう。表1の一二番の山内亀三郎は東京帝大法科大学政治科卒業である。副長は庶務係、労務係を兼務することもあった。三菱鉦業では課長ではなく、係の名称を使用した。このため、労務管理は鉦山長ではなく、副長が担当したのである。鉦山長・所長、副長の組み合わせとして、三つの事例が確認できる。

飯塚炭鉦の場合。「昭和六（一九三一）年八月、〔西原民平氏の〕後任として長崎団次郎氏が雄別鉦業所から転じて赴任した。（中略）この年の秋、長崎所長の下に初めて事務出身の副長が配され、江頭佳造氏が新任された」。³⁹飯塚炭鉦で一九三一年秋に初めて所長（鉦山長）は技師、副長は事務職の体制となった。このような組み合わせが全国的に拡大・定着していったようである。所長の長崎は雄別炭鉦から、副長の江頭は美唄炭鉦からと北海道コンビが福岡県に転動してきた。

尾去沢鉦山の場合。一九三五年四月、三菱鉦業に入社した小田正二（後に菱金不動産社長）は次のように回顧している。「私が三菱鉦業に入社して最初に勤務させられたのは尾去沢で、鉦山長は明石孝因氏、伊藤〔保次郎〕さんは副長で、庶務係と労務係の主任を兼ねておられた。当時は鉦山長には技術屋を、その下に副長として事務屋を配置するのが通例であった。係主任というのは

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉦山、三菱鉦業の史料（1）」（広瀬）

三六一

現在の課長に相当する職位であった。明石鉾山長は毎日坑内に入り現場に専念し、事務関係は一斉伊藤副長に任せきりで、名コンピの定評があった」。⁴⁰

美唄炭鉾の事例。一九三八年八月、美唄炭鉾に転勤した大槻文平は次のように回顧している。「私はその庶務係兼労務主任を命じられた。所長は技術屋だったから、私が事務の最高責任者というわけである。従ってこのポストは会社の中で美唄が大場所だけに課長クラスとして最右翼にあり、非常な抜てき人事といわれた」。⁴¹

『三菱飯塚炭鉾史』は巻末に歴代の所長、副長リストを掲載している。鉾業経営の実態を知る著者である麓三郎の慧眼である。⁴²

〔史料〕

・高橋孝三郎

「佐渡鉾山では」貧鉾は全部廃石として海岸一帯に廃棄せられ、その量たるや莫大なもので、現存相川町は、この金鉾廃石上に基礎をおかれたものとも考えられる。(中略)一方坑内において金鉾として稼行された鉾脈の他に銅を含む硫化鉾物を産する金銀鉾床もあり、その後発達した混末法ないし青化法による金冶金技術の補助的設備として金銀浮遊選鉾場の設備は当然考慮さるべきであった。

しかしその設備たるや、既存設備を利用して容易に追加可能なので、浜石採取上当然必要であり、同時に金銀浮遊選鉾試験の目的で極めて意義あるものであった」。⁴³

「太平洋戦争開始後の」かかる情勢下において佐渡の運命は果たして如何なることかと関係者一同焦心の的となったが、佐渡鉾山は永年金山として一般に知られたが、鉾脈中には七助脈のごとく、銅鉾を産するものもあり、また鶴子支山のごとく銅山として稼行性あり、また鳥越脈奥部勘太夫には昔時銅山として採掘せられた豎坑跡が歴然として残存するなど、銅山としても稼行価値あり、現実に直島〔製煉所〕送り金銀精鉾中に数10廬の銅を含む事実も認められておった。

かかる直接関係の事実を立証すれば、佐渡は銅においても、探鉱の余地ありとの結論に達し選鉱場その他の施設は暫時解体見合わせの結論に到達した。これより先、私は昭和一六（一九四一）年六月佐渡鉱山長に新任せられ、鋭意探鉱に専念しておったこと申すまでもない。」⁴⁴

・明石孝因

① 「拡張資材の配給が、分配の公平と云ふような立場からでもありませんかどうか知りませぬが、なか／＼思ふやうに行かぬのであります。それで甲の設備も拡張し、乙の設備も同時に拡張するやうなことでは、現在のやうな資材の少い際には容易なことではないと思ひます。それで私達は重点主義に考へまして、片つ端から建設させ完成したならば次へ移ると云ふやうな風に配給をやつて行つたならば、却つてもう少し早く補充が出来るのではないか、と斯う考へて居ります。」⁴⁵

② 「私が学校を卒業し、探鉱係員として三菱鉱業会社に入社した当時は、未だ手掘の時代で、掘鑿作業が思う様に捗らず、引いては全体が制約を受けざるを得ない次第で、機械掘への転換は重要な問題の1つでした。現在の様に進歩を遂げる迄の苦勞は相当なものであり、その他不況鉱の復興に、新山の開発に、休止鉱山の再開に、災害の復旧に、或いは戦時中の増産等、苦勞致しました」。⁴⁶

六・三菱鉱業本店の平沢幹勞務部長の文章

〔解題〕

現時点では佐渡鉱業所での朝鮮人労働者に関心が集中している。しかし、佐渡鉱業所は三菱鉱業（一九三三年四月設立）が経営した数多くの鉱山、炭鉱の一つに過ぎない。三菱鉱業は日本国内で最盛期には四七ヶ所の鉱山、炭鉱を経営していた。これらのほとんどの事業場に朝鮮人を動員していた。⁴⁷

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三六三

三菱鉱業が全社として日本国内外の鉱山、炭鉱を経営する場合、次のような経緯が想定できる。部門ごとに本店から場所（鉱山、炭鉱）に各種指示・通達が出される。場所からは年報「事業報告書」以外に多くの報告書や文書を本店に送付する。鉱山長・所長は本店で一ヶ月に一回開かれる「場所長会議」に参加する。本店採用のエリート（技術者、事務職）の場合は頻繁な人事異動が実施され、その過程で一時的に本店勤務を経験する。全社的にこれらを繰り返すことによって、本店の方針が全場所に徹底され、平準化されたと思われる。⁴⁸

労務部門で多くの場所へ労務管理を指示したのは三菱鉱業本店の労務部であり、その中心的な人物が平沢幹（一八八八〜？）である。日本人労働者に加え、朝鮮人労働者の労務管理も平沢が指導したと思われる。

平沢は岩手県出身で、五人兄弟の長男である。一九一五年に東京帝大法科大学政治科を卒業し、一九一六年三菱合資会社炭鉱部（木村久寿彌太郎長。木村は後に三菱鉱業初代会長）に入社した。⁴⁹一九一七年春、新設された東多久炭鉱の古賀山炭鉱（佐賀県多久市）に出向した。平沢は古賀山炭鉱で下宿、鉱夫長屋、納屋頭、鉱夫と交流を深めた。ここで早くも古賀炭鉱青年修養会の名称で、従業員団体を設立した。平沢は労務専任者のテストケースで、後に成功と評価された。これ以降、三菱鉱業は大卒者を労務係員として採用し始めた。⁵⁰

鉱山、炭鉱の場合、各社とも創業当初は技術者のみを採用した。初期の三菱合資会社鉱山部の場合、技術者のほとんどが大学の鉱山冶金科卒業生で占められていた。⁵¹平沢は大学の文系を採用する最も初期の段階の事例と考えられる。

平沢は一九一九年一〇月に長岡徳治三菱長崎造船所職工課長とともに、ワシントンで開催された第一回国際労働機構（ILO）総会を見学し、合わせて欧米諸国の労働事情を視察して帰国した。⁵²一九二〇年四月に本店総務課に初めて労務係（従来は鉱夫係）が新設され、平沢が初代労務係主任に就任する。平沢は一九二〇年頃に「労務問題について」を書く。⁵³当時の総務課長は東京地方裁判所検事出身の船田一雄（一八七七〜一九五〇）である。船田は後に三菱鉱業常務取締役、一九四三年に三菱本社取締役理事長

にまで昇進する。⁵⁴

平沢は「労務政策について」で、労務は労働者か会社の一方的な味方ではなく、「産業の味方」という立場にあり、「安人昌業」（三菱鉱業のスローガン）を目指すべきで、これを具現する二本の柱が従業員団体と労務組織である、と述べている。⁵⁵ 平沢の労務管理の理念は後の三菱鉱業の労務担当者に受け継がれた。こうした方針により、一九一八年、一九一九年頃から各場所に労務者団体が結成され、ばらばらだった名称は一九三二年に協和会へ統一され、労使協調機関として完成された。

平沢を中心とする三菱鉱業のこうした労務政策は単に一社だけのものではなく、後述するように日本の鉱業会社全体の動きとほぼ軌を一にするものだったといえるだろう。大企業の労務管理面を少し見てみよう。

労務管理部門の設置は三菱鉱業（平沢労務係長）を嚆矢とし、これ以降は古河合名（林癸夫未労務課長）、古河鉱業（氏家貞一郎労務事情主任）、日本鋼管（河田重労務課長）、芝浦電機（内藤健司工人課長）、住友本店（津田秀栄第二主査）、住友伸銅所（三村起一工場課長）、電線製造所（佐伯長生工場係）、三井鉱山（長沢一夫調査部長）等で設置が続き、職制上独立の人事労務担当部門を設けた。⁵⁶ この中で二人の学歴がわかる。氏家貞一郎（一八八七）は一九一二年東京帝大法科大学政治科を卒業した。⁵⁷ 津田秀栄（一八九三）は一九一八年に東京帝大法科大学を卒業した。⁵⁸ 平沢も含め九名のうち少なくとも三名は東京帝大法科大学卒業であり、最高級のエリートが労働者を管理する立場として登場してきた。こうした顔ぶれが中心となって、その後日本企業の労務管理を牽引していく。

一九二二年八月、日本政府は健康保険法の成案を得るため、農商務省に労働課を新設した。政府が作成した「健康保険法要綱」に対し、日本工業倶楽部（初代理事長は団琢磨）は主要な民間企業の労務担当者二〇名を調査委員として、これを検討させた。民間会社の労務担当者が委員となって共同で調査に当たったのはこれが最初だった。この中に平沢も含まれていた。⁵⁹

第一回ワシントン国際労働会議で女子、及び少年労働者の深夜業、地下鉱業禁止が採択されたことは日本の鉱業界に大きな衝撃

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三六五

を与えた。このため、一九二四年三月に石炭鉱業連合会と鉱山懇話会が主催して、官民共同で鉱業労働事情調査会を設置した。民間側で幹事として実務を担当したのは、平沢、長沢一夫（三井鉱山）、氏家貞一郎（古河鉱業）などだった。日本政府はこの調査会の報告に基づき、鉱夫労役扶助規則の改正を行った。⁶⁰

三菱鉱業では一九二五年に生野鉱山（兵庫県）、一九二六年と一九二七年に尾去沢鉱山（秋田県）で大規模な労働争議が発生した。これに衝撃を受けた三菱本社は一九二五年六月に「労務審議会」を新設し、労働組合、労働協議会委員会などについて検討し、今後の方針を決める。船田一雄取締役が主導し、実務は平沢が担当する。⁶¹

一九二八年四月、三菱鉱業に入社した大槻文平は本店での様子を次のように回顧している。「大学を卒業して会社にあいさつに行くと（中略）現場の労務を統括している本店総務部の労務係につれていかれた。労務係の主任は平沢幹さん（後に労働部長）という方だった。平沢和重さんのお兄さんで、日本の労務管理の先駆者の一人で、三菱鉱業の労務管理体制もこの人の時代に組織立てられた」。⁶² 平沢は入社以来一貫して労務畑を歩き、一九二〇年四月に初代労務係主任となる。

三菱鉱業の労務組織については一九三四年三月に総務部労務係が昇格して労務部（初代部長は村上伸雄常務が兼務）が新設された。副長の平沢は一九三六年三月、初代の専任労務部長に就任した。敗戦時までその職を務めたようである。労務部には、労務係、福祉係、庶務係が置かれ、後に現場係が加わった。⁶³ 平沢の労務方針をここでは「平沢労務政策」と呼んでおこう。

一九三〇年代に石炭鉱業連合会、鉱山懇話会の主要各社から労務担当者が集まり、「共同調査会」という労務問題の専門委員会を設置した。委員は長沢（三井鉱山）、平沢、氏家（古河鉱業）、中田謙二（日本石油）、前田一（北海道炭鉱汽船）、津田（住友）などだった。彼らは社会局の労働組合法案は階級闘争を助成する革命的法案であると断定し、代表の氏家、前田が日本工業倶楽部の指導者（団琢磨、中島久万吉、大橋新太郎）に反対の立場を説得した。⁶⁴

ここで前田一（一八九五～一九七八）が初めて登場する。前田は一九二一年に東京帝大法学部法律科を卒業し、北海道炭鉱汽

船（以下、北炭とする）に入社する。夕張炭鉱労務係となり、これ以降労務畑を歩む。一九三四年に北炭資料課長兼会長秘書、庶務課長、北海道支店次長、労務部長を経る。前田は北炭時代に朝鮮人強制連行に従事している。

前田は後に次のように回顧している。「朝鮮には」だいぶ行きましたよ。当時は北鮮と南鮮に一カ所ずつ、北鮮は元山、南鮮は釜山に朝鮮募集センターがありました。そこにそれぞれ専属に私の会社の請負人がおるんですよ。それがあっちこっちから労務者を集めて一五〇から二〇〇人ぐらいになると、会社に連絡をとってくる。そうするとそれをひとまとめにして北海道につれていく。その受渡しを釜山、あるいは元山でやるということになると、監督者がそこからみんな引率してくるわけです。そのときわれわれは現地に乗り込んで行って受け取るわけです。ところがこれがまた容易なことじゃないんですよ。途中で逃げるというか、どこかへ行ってしまうもんだから、朝鮮語はぜんぜんわからんし、引率するには、もうほんとうに苦労したものです。なるべく逃げる機会のないように、船で運んできたですね。船で運んで小樽にあげると、逃げる機会も非常に少なくなる。ただ釜山あたりから下関に渡って、山陽線から東北線にかけてずっと汽車で連絡する。こいつは逃げられる機会が多くて、輸送責任者であるわれわれは、夜の目も眠らんぐらい監督していなければならない」⁶⁵

一九四三年に労務部長の前田は『特殊労務者の労務管理』（山海堂出版部、一九四三年）を刊行し、強制連行の朝鮮人、中国人の労務管理方法を詳細に語っている。前田は一九四五年に取締役に⁶⁶なる。前田が「特殊労務者」の著書を執筆したことは突出した行動のように思われていたが、上述の労務担当者の経緯を見ると決してそうでなく、鉱業を含む大手企業の労務管理者に共通する必要性があったと思われる。前田以外にも社内文書としてこのような強制連行朝鮮人の管理方法を書いた者がいた可能性がある。戦後は一九四八年に日本経営者団体連盟（以下、日経連とする）の設立と同時に諸井貫一、加藤正人代表常務理事の下で前田は松田正雄と共に専務理事になる。傘下の地方別組織の中には、労務畑出身の河田重が関東経営者協会の委員長として入っている。⁶⁷

話を元へ戻す。一九三一年五月、全国産業団体連合会（全産連）（郷誠之助会長）が代表的な一四〇余団体によって結成された。

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三六七

社会労働問題に関心をもち、労働、社会、産業の問題に対して実証的な調査研究を行った。その中で中心的な役割を果たしたのが「産業平和方策委員会」である。これは一九三一年一月、全産連の関東産連（藤原銀次郎常務委員長）が参加企業の労働担当主務者を委員として設置したものである。委員は、平沢、前田（北炭）、氏家（古河鉱業）、河田（日本鋼管）、長沢（三井鉱山）、保田藤一（石川島造船）、野村卓三（東京製綱）、内藤（芝浦）、加納憲治（新潟鉄工）、新田宗雄（東電）、桂皋（東京瓦斯）、長妻信篤（古河電工）、土田武雄（池貝）、宮内一多（三共）、岸由太郎（京浜電鉄）、小杉義治（浅野セメント）、君島潔（共同印刷）の一七名で、長沢が委員長となった。⁶⁸ このように、大手企業の労働担当者は各種の委員会や会議を通して、労働管理の基本方針を蓄積していったと思われる。

三井鉱山では一九三九年二月から一九四三年二月まで、長沢一夫の部下だった深川正夫が本店の労働部長を務める。徹底した労働管理方法は、「深川労働政策」と呼ばれた。深川は一九四〇年一月に結成された大日本産業報国会で理事兼錬成部長を務めるなど最高指導者の一人だった。⁶⁹ 平沢は前述したように、労働管理問題では業界の第一人者だったが、深川のような積極的な対外活動をしていない。その理由は、岩崎小彌太三菱社長が「政治不干渉」主義を主張したためであろう。⁷⁰

平沢は敗戦後、一九五三年に日本産業協力連盟を設立し、運営する。戦前の財閥系企業である、長沢（三井鉱山初代調査部長）、氏家（古河財閥理事）、三村（住友本社理事）などが役員となった。機関誌「人と人―産業協力運動」を隔月で刊行した。一九五六年六月に創立三周年を迎えるため記念事業として『日本労働管理年誌』の刊行を計画し、後に二冊（同刊行会、一九六二年、一九六四年）を刊行した。この中に三菱鉱業の文書は次の三本が掲載されている。三菱鉱業株式会社内『労働係』及び「労働部」設置に関する資料（一九二〇年）、三菱鉱業労働部編『工場委員会制度要覧』、三菱鉱業労働部編『安米制度』ニ就テ（一九二七年）である。⁷¹

平沢は発起の趣旨で、「労働管理の歴史的研究と資料の系統的整理は全く空白と断してもよいほどに放置されたまゝ、になってい

ることはまことに遺憾である。(中略) わが国労務管理の草分けとして労務問題の変遷に身をもって当って来られた先達の方々も今日では数えるほどしか生存されていない事情も加わり、今にして史料を蒐集・整理せず、このまゝ拱手して自然の推移に委すならば、遂にあたら貴重な先達の体験と資料は全く地中に埋もれざるを得ないであろう。そこに到らしめることは一に現代に生きるわれわれ関係者の怠慢ではなからうか」と危機感を示している。機関紙「人と人―産業協力運動」は一九六六年一月号が終刊である。⁷² 日本産業協力連盟はおそらく戦前に彼が構築した「平沢労務政策」を、戦後の新しい経済活動の中でどのように適用・発展させるかを研究・活動していたと思われる。

平沢の戦前に関する文章としては、次の六本が確認できる。

「労務問題について」『三菱鉱業史』三〇四頁から再引用。現物は未確認。

「労働移動に就て―鉱夫移動問題」『日本鉱業新聞』四七六号(一九三三年四月)

「健康保険法に就て」『資料彙報』一〇二号丁(労働之部) 一三冊(三菱合資会社資料課、一九三三年一〇月) 現物は未確認。

「あ野間君」、龍宮谷清松編『野間恭一郎の思い出』(同人、一九三八年)⁷³

「労働問題黎明期に於ける思ひ出」、船田一雄氏記念刊行会編『船田一雄』(同会、一九五三年)

「労務の道友」、伊藤保彦・福井純一編『追想伊藤保次郎』(藤木出版、一九七三年)

〔史料〕

① 「私は元来労務は私的企業にあつても一種の公務的なもの、換言すると公共的性格を帯びる仕事と見ていた。すなわち労務は労働者とか経営者とかの見方というのではなく、産業の味方という立場にあると考えていた。そして従業員の方(労働)の役立ちを十分ならしめ、企業の役立ちも全からしめる。任分本領そこにあり、その故に人を安んじ、業を昌んならしめる、すなわち「安人昌業」を目して労務を役立たしめ、産業協力者としての本義を遂げさせる。そのための世話、面倒に任ずることに

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料(一)」(広瀬)

ほかならない。この労務観から「安人昌業」を具現する2本の柱が従業員団体と労務組織である。換言すれば、労働者の能率を如何にして適切、最高度に発揮させるか、その産業協力者たる本文を如何にして十分遂げしむるか、それが真の労務の狙いである。⁷⁴

- ②「即ち大体に於て北海道各炭坑鉦夫の移動率は過去六ヶ年に於て一ヶ月平均八%乃至一〇%余である。而して移動の比較的多きは四、五月の頃と概観することが出来る。今此の全般的の数⁷⁵を、日本鉦業新聞第四百七十一号所載の北海道炭鉦汽船会社所属各炭坑（Kとす）鉦夫の其れ及び其の他道内二・三炭坑のそれと比較するに、矢張り大様同程度の傾向を示してゐる。即ち、大正八（一九一九）年以前は一割有余の移動率を算したるも、同九（一九二〇）年以降は七八分見当に減少して居る。これは全道の数字に付てもほ、同様である。（中略）

要するに鉦夫移動防止の問題は結局、「鉦夫を如何にして勤続せしむべきか」に在り矣。而して相当期間の勤続鉦夫と多少と移動率の高低とは、或る程度迄当該鉦業所の一般を卜知すべき尺度である。終に語有り、「方策は熱と力とを以て実行せらるゝに価値あり。」⁷⁶

- ③「わが国で労働運動が势力的に巻起つたのは大正七（一九一八）年、恰も此年嘗ての三菱鉦業株式会社が創立され、船田（一雄）氏はその本店初代の総務課長として労務問題の統括にも任じた。其時から両三年間の社会不安期が労働問題乃至労務問題の重要な初期で、当時発足した三〔菱〕鉦〔業〕が数十の場所、数万の授業員を擁して、大戦後の其異常期に、労働基本政策を建てる事は容易ならぬ重大時であつたが、故岩崎（小彌太）会長・木村（久寿彌太）会長・三好（重道）常務等名幹部の下、〔船田〕氏の優れた感覚・見慮・行力とその士的人格の働きがあつて、此基本が確立され、その貢献は没すべからざるものがある」⁷⁶

- ④「故人〔伊藤保次郎〕は大正六（一九一七）年、東京帝大の経済学部を了えて、同年、三菱合資に入社した。当時、同社に属

した兵庫県下の明延鉱山、次いで秋田県の尾去沢鉱山勤務を経て、三菱鉱業本店労務部に移り、爾来、いっしょに労務の道を行ってきた、いわば労務道友ともいえる間柄にあつて、いろいろの事件、特に大正十五（一九二六）年晩秋から翌昭和二（一九二七）年早春にかけての尾去沢鉱山における労働紛議、また後年の、いわゆる尾去沢ダム事件その他もろに対処して、ともにやってきたことがこの頃のように思い出される。精勤、労をいとわず、労務部副長に進み、大いに嘱望していたが、その後、会社が大陸および南方方面へ進展のために新設した海外「調査部」のほうへぜひひと、会社の強い意向で、ついに転部（やがて当該部長として大いに活躍）の運びになったが、しかしそれからとも終始変わらず、労務同志として交わりが続いた。そして終戦後、日本産業協力連盟結成にあたり、その発起人の一人として、また理事の一人として、また同志の研究機関である人務研究会同人として、あるいは有志の集まりである道交会のメンバーとして、実に忘れがたい実友であつた。」⁷⁷

7・「平沢労務政策」と三菱鉱業・美唄炭鉱労働者

〔解題〕

「平沢労務政策」が佐渡鉱業所でのように適用されたのかは史料が不足しており、明らかではない。そのため、ここでは三菱美唄炭鉱労働組合『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』（岩波書店、一九六〇年）を通して、日本人労働者の立場から「平沢労務政策」の実態を見てみよう。この本は一九五四年から編集員会が文書記録や聞き取りを行い、六年間に渡って六冊の資料集を出し、これをまとめたものである。⁷⁸

美唄炭鉱は一九一五年四月に三菱合資会社が取得し、一九一八年以降は三菱鉱業が経営した。その後は出炭が増加し、一九二六年には年産百万トンに迫るほど上昇した。三菱鉱業の全炭鉱の中でも第一位の出炭量を示す大炭鉱となった。最高出炭量は一九四一年の約一六一万トンで、これは三菱鉱業においても、各場所単位の年産高としては史上最高だった。一九四一年一二月時

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三七一

点における労働者数は六三七四名だった。⁷⁹ 労務係の大槻文平によれば、一九三〇年時点で約七百名の朝鮮人労働者がいたという。⁸⁰

戦時期になると、三菱美唄炭鉱への朝鮮人強制連行が開始された。全体数は不明である。一九四五年六月時点での三菱美唄炭鉱の労働者は合計九六五一名である。内訳は、日本人が四四四一名、朝鮮人が二八一七名、臨時夫が五二六名、短期徴用者が四九〇名、中国人が二六五名、請負夫が一二二名である。請負夫の中には鉄道工業に連行された中国人三六二名の一部が含まれている。

坑内と坑外の担当比率を見ると、日本人は坑内が四七・九%、坑外が四二・一%とほぼ同等である。これに対し、朝鮮人は坑内が九〇・一%、坑外が九・九%となり、朝鮮人労働者の圧倒的多数が危険な坑内労働に従事していた。⁸¹

戦前の労働現場を経験した人々の証言を史料に置く。日本人労働者の状態ですらこのように過酷だったのであり、その下位におかれた強制連行された朝鮮人の場合はさらに待遇は悲惨であったと思われる。後述の史料から、「平沢労務政策」の特徴として、徹底的な思想統制、労使協調すら認めない「一君万民」思想、職制の権威を絶対化することでの労働強化等が見られる。

佐渡鉱山と美唄炭鉱は鉱物も異なり、事業規模も異なる。このため、美唄炭鉱の事例がそのまま佐渡鉱山に適用できるとはいえないが、一つの参考事例としてあげておく

〔史料〕

・一九三〇年頃からの徹底的な思想統制 「前述の『中央公論』『改造』を読んだというだけで、危険思想のレッテルを貼り、首切りの対象にされたのをみてもわかるように、会社は労働者の思想動向の監視には厳重をきわめ、見張の労務係員は特高警察と少しも変らなかった。進歩的な雑誌を購読しようとすれば、『婦人倶楽部』等の表紙を貼りかえて持ちあるかなければならなかった。また短歌や俳句を作る労働者はとくに警戒され、労務係員は留守中無断で家へ入り、書棚をひっかき廻して書籍を持ち去り、あとで呼びつけて購入先を尋問した」。⁸²

・一九三七年七月の日中戦争勃発以降 「三菱美唄鉱では労務主任以下全力をあげて各部落集会所で毎夜講演会をひらいた。それは「我等戦いの中にあり」「炭山は戦線に通ず」のスローガンを合言葉に、戦争宣伝と労働強化を押しつけることであった。三菱美唄『協和会報』は「日本精神を昂揚し、勤労精神の作興を図ると共に鉱業災害の防止に努め、鉱業能率の増進を期し以って物心両方面に亘り、我が鉱業界の進展を企図し鉱業報国の実を挙ぐる」と説明している。「黙って働くこと。能率を上げること。しかも災害を起こしてはならぬ。そして休んではならぬ」この思想は戦争中労働者に押しつけた一貫した思想であった。⁸³

・協和会の改組 「同〔昭和〕十四年二月に会社は協和会の改組を発表した。もともと協和会は、労働者の陳情機関であったが、会社にいわせると労使協調の場であった。ところが改正の骨子は、日本臣民には階級的な差別はないとの理論に立った。鉱業所長自ら会長に就任（以前は副長が会長であった）、組織外であった職員を賛助会員に加入させた。会長に就任した所長は次のように挨拶している。

「事業主と従業員との対立的な観念が抜けきらない、いわゆる労使協調という建前、これがすでに対立を意味しているので、これは一君万民の我が国情に絶対に合致しない。元来従業員と申します本当の意味は、本社におきましては社長も従業員でもありませんし場所にあつては所長他全員従業員であらねばなりません。この意味で積年の弊風を一掃し、全従業員が一致一心同体とならなければ、国家興隆の経済的基礎もなく、皇国産業の使命を果たすことができないのが本運動（産業報国精神運動―筆者注）なのです」。

このようにして労働者の生命と石炭が簡単にとりかえられる思想が植付けられてゆくのである。⁸⁴

・太平洋戦争以降 「増産競争・皆勤実行競争・職場の規律確立運動（大日本産業報国会提唱）が主な内容であった。ことに職場の規律確立運動では、職場を戦場と呼び、労働者を産業戦士とおだて、軍隊の規律をとり入れ、職制の權威を絶対化することによって労働強化をはかった。（中略）こうして職場も軍隊と同じく点呼がおこなわれるようになったので労働時間は、それだけ長

くなった。⁸⁵」

・坑内切羽の状態 「払切羽における職制の圧迫もひどかった。切羽の山押し（天盤が下がってくる）がひどくなると支柱がみしみし鳴り、短い柱を立てても見る間に柱がきいてしまうという状態で作業は続けられた。朝鮮人労働者や新入りは腰が落着かなくなる。係員は「びくびくするな。俺が逃げろというまで離れていかん。戦争に勝つためにはお前達の一人や二人は死んだって、それくらいの犠牲はやむを得んだ。敵弾の下をくぐる思いなんでもない」と叱咤している。⁸⁶」

・一九四五年一〇月の労働組合結成に関し、街頭に張り出された檄文「全山五千の兄弟たちよ！穴のあいた地下足袋に馬の靴のような手造りわらじをはいて頑張った兄弟たち！よもぎだんこの代用食で辛抱し通した兄弟たち！勝ち抜くために！の一言でどんな不平もおさえておさえ、どんな不満も我慢した兄弟たち！俺たちの我慢も辛抱もこの辺が頂上だぞ！炭山駅の配給ものはまず何俵かを差し引いた残りでなければ俺たちに配給しない。人間の家というよりも鼠の巣に近いボロ畳、電灯は一つで防空電球、戦争に勝つためなら仕方がないが民主主義日本の再建を叫ばれる現在でも今だに改善されないのは一体全体どうしたわけだ。⁸⁷」

八・三菱鉱業本店の伊藤保次郎労務部副部長の文章

〔解題〕

伊藤保次郎（一八九〇～一九七二）は山形県出身で、一高を経て、一九一七年七月に東京帝大法科大学経済学科卒業。同月三菱合資会社に入社。同月生野鉱山、同一〇月明延鉱山の事務主任となる。ここで労使の激しい対立を経験する。伊藤は後に次のように回顧している。「大学を出た事務屋の第一号というわけで、私は労務と総務をいっしょにした事務の主任という格好で明延鉱山にやられたが、そこで私の見たものは、生野鉱山にはなかった労使の激しい対立であった。なるほど、本当の現場とはこのようなものなのかと、私はおもい知らされた⁸⁸」。一九一九年生野鉱山を経て、一九二〇年五月尾去沢鉱山で勤務した。ここは生野となら

んで三菱鉱業でも有数の大事業所で、従業員の数も三千名近くだった。伊藤はここで「労働問題で最も深刻な経験をした」という。⁸⁹

一九二六年六月に本店総務部に勤務。再び一九三一年一〇月尾去沢鉱山に移転し、一九三三年一〇月尾去沢鉱山副長となる。

一九三六年七月、本店労務部副長となる。早川勝（後に日経連専務理事、日経連顧問）は三菱鉱業に就職が決まり、生野鉱山へ赴任する直前に本店に出頭した思い出を次のように回顧している。「当時、総務部の労務担当の副長が平沢幹氏（後に労務部長）、その下に伊藤（保次郎）さんと末綱健吉氏（後に雄別炭鉱鉄道社長）とが、右大臣・左大臣然と坐って居られ、新入社員の私に対し、赴任後の注意事項などを指示されたことは、いまでもおぼえている次第です」。⁹⁰

また、麓三郎（後に三菱鉱業監査役、三菱鉱業セメント社史編纂室）もこのころ伊藤と知り合っている。「伊藤（保次郎）さんを知ったのはたしか昭和の初期、伊藤さんが尾去沢勤務から本店労務に転動されたときであつたらうか。その頃は労務係で主任は平沢（幹）さんであつた。伊藤さんは尾去沢ダム変災善後措置のため三度尾去沢に赴任され昭和一二（一九三七）年夏頃本店に復帰された。その時私は伊藤さんの後任として尾去沢に赴任した」。⁹¹

一九三六年一月二〇日に尾去沢鉱山の鉱滓ダムが決壊し、市街地に流出して三六二名が犠牲になる大惨事が発生した。さらに、二月二二日にも第二次決壊が起こり、一二名が死亡した。伊藤の後任だった副長も犠牲になった。すぐに尾去沢で二回、計約一年間勤務した伊藤は現場責任者として、労務部副部長兼尾去沢鉱山副長兼臨時復興部長の肩書で派遣された。事態収拾に奔走した伊藤は、次のように回顧している。「事件発生以来一年半、私の毎日はほとんど着の身着のままで、ときに酒をのんではごろりと横になるという生活が多かつた。疲労と偏食も手伝つてか、そのうち私はものすごい全身湿疹にかかり、ついに盛岡病院に一月入院してしまつた。まったくのところ、あのころの生活は心痛苦痛の連続であつた」。⁹²

一九三七年六月参事となり、一九三七年八月に労務部副長として本店に戻る。一九三九年一月に調査部副長、一九四一年三月に調査部長、一九四三年一月に海外部長となり、中国山東省にある招遠金山の本格的操業に着手する。一九四二年海軍の命令で

海南島に行き、採掘のための計画をたてる。軍用物資の需要拡大に対応し、一九四三年一月調査部は海外部に改称され、伊藤は部長となる。軍の命令で飛行機の生産増強に駆り出され、複数社で経営していた日本アルミニウムは三菱鉱業が一社で担当することになる。一九四四年五月に同社の専務取締役となり、アルミニウム増産を進める。同年一〇月に参与。一九四六年九月に同社社長となる。一九四七年二月公職追放を受け、一九五一年六月追放解除となる。一九五五年五月、三菱鉱業社長に就任する。一九五五年一月三菱セメント社長となる。⁹³死亡した翌年の一九七三年に、伊藤保彦・福井純一編『追想伊藤保次郎』（藤木出版、一九七三年）が出版される。これには八一本の追想記が掲載される。⁹⁴

伊藤には戦前に関する三つの文章が確認できる。

「船田おっさんの想い出」、船田一雄氏記念刊行会編『船田一雄』（同会、一九五三年）

「藍綬褒章受章感想」『鉱山』一六五号（一九六二年四月）

「私の履歴書」、日本経済新聞社編『私の履歴書』一〇集（同社、一九六七年）

〔史料〕

① 「僕がこのおっさん〔船田一雄〕に最初に御目にかかったのは大正六（一九一七）年に三菱鉱業に入社して総務課に勤務した以来のことであるから、学校の先輩後輩よりも会社の後身として永い生涯御世話になつた次第である。入社した時は堤長述さんが総務課長であつたが、間もなく船田おっさんが課長になったと思ふ。（中略）労働関係において船田（一雄）さんの強調されたのは、労務統制と労務者団体設置であつて、之に依り経営者の公明なる態度を表明すると共に、労務者全体の意嚮を常に反映させる用意を整えられたものと思われる。（中略）労務担当者育成には特に力を注がれたように見受けられ、他社に秀でる結果を産んだのは右のような考え方の一貫と、常に自身挺身されたに因るものであらう」。⁹⁵

② 「この褒章を受けるのは何等かの功労があつたという認証である事は判っているが、いざ自分の場合になって正直に考えて見

ると、世間に公表されるに値するものはない。親父の細脛を齧って学窓を出ると同時に左程の苦勞も、また身を削るような仕事もないのに相当な地位にも就いて来た経過を追想して見ると随分恥ずかしいものだと思う。⁹⁶」

③「三菱鉱業が労務管理の体制について真剣に検討を開始、その体系をたてることになったのも、尾去沢鉱山労働争議に起因するところが大きかった。当時の職制は現在のようにハデなものではなく、いまの労働担当重役にあたるのが本社の総務課で、課長が船田一雄氏、その直属の労務主任に現在（一九六七年）産業協力連盟を主催している平沢幹氏がいて、ここで社内全般の労務管理を統括していた。私などは働いた部署の関係で、特にこの両氏から格別の薫陶を受けたものである。（中略）会社は基本的な対策を練りだしたが、それには弾圧だけでも、また反対の温情主義だけでも問題の根本的解決にならないという見地から、先の船田、平沢の両先輩が中止になって、ここに新しい労務者団体がつくられ、これに平素から労務者の率直な意見を反映させ、いわゆる労務統制といって、会社の労務管理基準を統一して公正に運営していくという方針が決定したのである」。⁹⁷

九・三菱鉱業本店の大槻文平総務部副長兼庶務課長の文章

〔解題〕

大槻文平（一九〇二—一九九二）は宮城県出身で、一高を経て、一九二八年に東京帝大法学部政治学科を卒業。同年、三菱鉱業に入社。同年四月美唄鉱業所労務係に配属される。副長は小林千太郎（後に初代三菱鉱業社長）である。⁹⁸朝鮮人に関する報告書を江頭佳造労務主任に提出する。本店に送ったら、本店労務主任の平沢幹がこれを認めて、『社会調査時報』への掲載を紹介する。大槻の報告書は異例にも、「北海道に於ける朝鮮人鉱夫問題（上）」『社会調査時報』二二二号（一九三〇年一〇月）、「同（下）」一二二二号（一九三〇年十一月）として刊行される。この中で大槻は美唄炭鉱の名称は挙げず、「同一条件の下にある北海道のA、

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三七七

B、C、D四炭坑の総合的結果である」としている。末尾には「執筆上懇切なるご指導を賜った先輩平沢〔幹〕、江頭〔佳造〕両氏に深甚なる感謝を捧げます」と書いている。

一九三一年一〇月に本店総務部労務係となる。一九三五年四月、大学を卒業後、本店労務部に配属された白川義正（後に東京貿易顧問）は当時の状況を次のように回顧している。「部長は重役が兼務、日常業務は副長が裁量、部には庶務・労務・福祉等の係があり、私は福祉係に所属しました。労務部は現業員の管理、統率業務を担当する極めて重要な部ですが、なかでも労務係はその中枢で、大槻〔文平〕さんは係主任でした。

入社して一ヶ月経った五月一日、私達労務部の新入社員数名は大槻さんに引率され、メーデーの行事を見学すべく労働者集合地の一つである芝公園に出かけ、彼らが集合を終えて隊伍を組んでメーデー大会場に向け出発するのを見とどけて一旦会社に戻り、午後大会場の上野公園に出かけました。

当時労働者（大衆）の集合など、警察の厳しい監視の対象となっており、メーデー行進も騎馬巡査を含め、帽子のアゴ紐をかけた警官多数が配置された中を労働者の群れはメーデー歌を高唱して行進しました。

大会終了後、私達一行は池の端のおでん屋で昼食をとりましたが、大槻さんは新参の私達に労務管理の体験談をお話し下さり、「いずれ君達は場所（会社では現場のことをいう）に行くが、労働者と親しくなることは大切だが、狎れあってはいけない」と念を押すように申されたことを今なお憶えています⁹⁹。本店労務係である大槻の横顔がよく描かれている。

大槻は一九三五年一〇月に生野鉱業所労務係、一九三七年三月直島製錬所庶務係兼労務主任となる。一九三八年七月、直島製錬所に赴任した野崎二夫（後に菱交会副会長）は大槻に初対面の挨拶をすると、「何故連絡もせずにおくれたか、不都合千万！」と一喝され、その威力たるや、呑気な学生気分はいっぺんに吹き飛ばされた。即日労務係に配置され、見習社員としての教育を受けることになったのであるが、生産現場の見学、労使関係諸規定の勉強等の外に、大槻さん独自の教育があった。それは独身の労務

係とともに早朝駆け足で可成り遠い村の神社に参拝し、正座黙考するのである」と回顧している。¹⁰⁰

大槻は直島製錬所で、煙害問題の対策にあたった。「直島製錬所は生産を増強していったが、それに伴って煙害問題も起こり、地域住民からの苦情もふえてきた。私の仕事はそうした煙害問題の解決で、連日のように地域の人たちとの話し合いに出掛けた。相手は自分のおやじぐらいの年配の人も多く、なかなか手ごわかったが、美唄〔炭鉱〕での経験が生きたのだろう、比較的スムーズに解決できた」。¹⁰¹

大槻が離任した後、直島製錬所は一九四〇年三月から朝鮮人の強制連行（募集）を開始した。労務係の石堂忠右衛門が一九四〇年三月から一九四二年一月まで、七回に亘って朝鮮を訪問して活動した詳細な記録が残っている。石堂はこの間、約六二〇名の朝鮮人を連行した。¹⁰²

大槻はその後再び北海道に戻り、一九三八年八月に美唄製錬所庶務係兼労務係主任となる。大槻はここで朝鮮人強制連行（募集）を実施し、一九三九年一〇月から一九四〇年三月まで、前後四回に亘って約一一〇名の朝鮮人を連行した。¹⁰³三菱鉱業美唄鉱業所はこの時点から一九四五年八月までに多くの朝鮮人を強制連行した。また、これ以外にも多くの下請けの組（鉄道鉱業、黒田、原田、石崎、菅原、団、地崎、川西）があり、そこにも朝鮮人は連行された。¹⁰⁴正確な数は明らかではない。こうした朝鮮人労働者の過酷な労働と生活の実態は白戸仁康が膨大な一次史料を使い、詳細に記録している。¹⁰⁵

大槻は一九四〇年五月に美唄製錬所庶務係兼労務係課長に昇進した。次は北海道から九州に転動し、一九四一年八月崎戸鉱業所副所長兼庶務課長となる。再び本店に戻り、一九四二年一月に本店総務部庶務課長となる。¹⁰⁶取締役総務部長は池田乾治だった。一九四四年三月に本店総務部副所長兼庶務課長に昇進する。

敗戦後に三菱鉱業の上層部が追放を受けたこともあり、大槻は順調に昇進して、一九四九年三月本店の炭鉱本部労務部長となる。一九五〇年四月に取締役、一九五二年二月に九州事務所長に就任する。すでに「石炭斜陽時代」に入り、三菱鉱業は一九五三

年七月から約四千名の人員整理を行うが、これを炭鉱の多い九州で担当する。その後は要職を歴任し、一九六三年一月取締役社長に就任する。大槻は三菱鉱業にとどまらず、一九七九年から三菱系各社のトップが集う三菱金曜会の世話人代表になった。さらに日本経営者団体連盟（日経連）会長（一九七九年五月～一九八七年五月）を務める。¹⁰⁷大槻の死去の翌年、追想大槻文平編集委員会編『追想大槻文平』（三菱マテリアル、一九九三年）が刊行された。これには一三九名の追想文が掲載されており、大槻の日本における実業界（弔辞は永野健日経連会長）、政界（弔辞は中曽根康弘元首相）への影響力の大きさがうかがわれる。¹⁰⁸

大槻の戦前に関する文章として、次の七本がある。

- ・「支那を旅した男の手記から」、亜細亜学生出版部編『学生を見た亜細亜とところどころ』（同会、一九二六年）九二～一〇七頁。
- ・「北海道に於ける朝鮮人鉱夫問題（上）」『社会政策時報』一二二号（一九三〇年一〇月）
- ・「北海道に於ける朝鮮人鉱夫問題（下）」『社会政策時報』一二二号（一九三〇年十一月）
- ・『私の履歴書』（日本経済評論社、一九七二年）
- ・「業界への功績」、『追想伊藤保次郎』（藤木出版、一九七三年）
- ・「池田さんのこと」、池田亀三郎追想録編集委員会編『追想池田亀三郎』（同会、一九七八年）
- ・編著『私の三菱昭和史』（東洋経済新報社、一九八七年）

〔史料〕

- ① 「池田（亀三郎）さんとの縁は、私が三菱鉱業に入社したときに生じたわけで約半世紀を経たことになるが、その思い出を二、三書き記してみたい。昭和三（一九二八）年、私が入社したとき、池田さんは既に三菱鉱業の常務に就任されていたように記憶する。勿論、池田さんは技術畑の方であり、また雲の上の枢要な地位に就いておられたので、入社早々の私はお目にかかったことも全くなかった。しかし、私が美唄鉱業所に勤務していた昭和四（一九二九）年頃、視察に来られた池田さんが坑

内服に身を固めて、クラブから事務所に向われる凛々しいお姿を時々拝見した。その頃、池田さんは所内各課に質問書を出して居られた。池田さんは技術畑の方なのにもかかわらずその質問書の内容は広い分野に及んでおり、例えば私どもには、労働問題や当時発足したばかりの健康保険などに関し詳細な質問書をもつて来られ、回答を求められたことがあった。¹⁰⁹

- ② 「美唄（炭鉱）の先例等を調べに住友合資会社の津田（秀栄・故人）労働課長が来られた。（中略）津田氏は中肉中背ながら、なかなか重厚な感じのする人だった。お酒が好きで、その時も相当飲まれたように記憶しているが、話が仕事のことに及んだとき、「大槻君、炭鉱の労働の仕事で一番大切なことは、おしめの下をくぐる」と、ソロバンを忘れないことだよ」といわれた。この言葉は私の心に深く刻まれた。「おしめの下をくぐる」とは、長屋に干されているおしめの下を歩き回り、労働者としてよくコミュニケーションをせよ、ということである。（中略）「ソロバンを忘れるな」というのも、実に適切なアドバイスであった。というのは、労働係は労働者の教育・指導を担当し、またそのころから厚生的要素もあつて、どうしてのおカネを使うばかりで、儲けとは無縁であつたからである。この二つの言葉は、まさに労働管理の「要諦」と思うが、私自身も同じようなことを考えていただけに、私の琴線に触れたのだと思う。」¹¹⁰

- ③ 「はしがき

産業の合理化運動と共に失業問題が一層やかましくなつて来る。そして我国の失業問題は年々増加しつゝ、ある鮮人労働者の移入によつて一段と拍車をかけられ、従つて、この問題を離れて失業問題を論ずることは出来ないとする論ずる人もある。

今や日本内地にある朝鮮人は二十七万人を超え、内八割は筋肉労働者であると云はれている。単にこれだけの事実よりするも鮮人労働者の過去及現在の状態を知ることが吾々の緊要な一事であらねばならない。これは私が古いメモを辿つて複雑ながらも炭山労働者―特に北海道に於ける―としての鮮人によつて示された数字を並べて大方諸賢の御指導を仰ぐ所以である。以下掲げる統計は、大体に於て、同一条件の下にある北海道のA、B、C、D四炭坑の総合的結果である。¹¹¹

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

三八一

④ 「結語

今稿を結びに当つて更に鮮人使用の利害を列挙するならば、利益としては

- 一、一時に多数を募集し得ること
- 二、寄宿舎監督に如何による入坑歩合の向上を計る上に於て比較的容易なること
- 三、教育低く、思想幼稚にして統御し易きこと
- 四、係員の命令に従順にして作業の熱心なること
- 五、体質強壯にして力強く比較的困難なる作業に堪ゆること

(中略)

次に弊害としては

- 一、募集費多額に上ること
- 二、言語不通等により物議を醸し易く且つ付和雷同性に富むこと
- 三、衛生觀念に乏しく賭博、飲酒に耽る傾向強きこと
- 四、永住心に乏しきこと^{○、△}
- 五、教化上適當なる人物を得難きこと¹¹²

⑤ 「私が伊藤〔保次郎〕さんと一緒に仕事をしたのは、私が〔一九五五年五月に〕常務になってからであり、社員時代に直接の上司として仕えたことはなかった。というのは、伊藤さんと私は、職場がいつも本店と現場のすれ違いになったからである。それでも全く無関係であつたわけではない。昭和四（一九二九）年頃から、伊藤さんは自ら企画されて労務者の詳細な生計調

査を実施された。ところがこの調査結果のまとめを、昭和七（一九三二）年頃に私が担当することになった。この時私を感じたことは伊藤さんは実に緻密な人だなということであった」。¹¹³

⑥ 「本店では総務部労務係で、二年ぐらいかけてやっていた労働者の生計調査を、前任の伊藤（保次郎・元社長）氏から引き継いで担当した。綿密にデーターを集め、分析したところ、結果は「現行の賃金は安い」という結論になった。これでは具合が悪いというので、この調査結果はうやむやになってしまったが、私にとってはいい勉強になった」。¹¹⁴

⑦ 「美唄炭鉱での」仕事に慣れるに従い、炭坑にはいろいろな矛盾があることに気がつき始めた。そのひとつに朝鮮人労働問題があった。当時（一九三八年八月頃）、美唄には朝鮮人労働者が七百人ほどいたが、この朝鮮人労働者の質の悪さがよく話題になった。ところが、言葉が通じないのが最大の理由のようで、本当に質が悪いのかどうか、とことん検討したうえでの話ではなかった。そこで、私は朝鮮人労働者の炭坑労働者としての適否を検討してみる必要を感じ、朝鮮人の能率、負傷率、疾病率、出稼率などいろいろな角度から統計的に調べ、同時に、朝鮮人募集の手続きについても勉強した。

その結果私は、朝鮮人は日本人と少しも変らぬ、むしろ逆に優秀かもしれない適合性があるという結論を出した。だから、わけへだてなく訓練していけば立派な労働者として通用するというわけだ。

私はこの調査結果を「北海道における朝鮮人鉱夫問題」という論文にまとめ、江頭（佳造労務主任）さんに提出した。江頭さんがこれを本店に送ったら、本店労務主任の平沢（幹）さんが認めてくれて、「協調会」から出ていた「社会政策時報」に二カ月にわたって連載してくれた。協調会というのは当時芝の協調会館に本部を置き、日本の黎明期における労使協調をさかんに主張した団体で、その時報にはかなり権威ある論文が掲載された。私はこのころ現場の仕事に打ち込んで一番勉強したように思う。

当時の労務係は労働者の生活指導者であり、従って不公正是正のため、働く者を保護しなければならないという使命感を

持っていた。いうならば、今の労働組合のような役割をも果たしていたのである。¹¹⁵

⑧ 「〔昭和〕十三年八月、私は思い出の美唄鉱業所に再び転任することになった。（中略）美唄（炭鉱）は私の入社した当時とは異なり、高能率、低コストの三菱鉱業のドル箱的存在に発展していた。（中略）会社は増産のための労働者不足を補うため朝鮮人労働者の募集を行うことになった。青森、岩手、山形などからくる季節労働者では冬場しかもたず、すでに間にあわなくなっていたからだ。私は以前美唄（炭鉱）で朝鮮人労働者の研究をしたことがあり、これがこの時、大いに役立った。

募集人を朝鮮に送り、〔昭和〕十四年十月から翌年の三月ごろまで、前後四回にわたり現地募集をやり、これを朝鮮から船を仕立てて直接小樽港まで前後四回約千百名を運んだのである。この募集の責任者として私は美唄の外勤中最優秀でしかも酒を飲まない今野満雄、宮下栄次郎の両君を選んだ。これが見事の中に、両君はめざましい働きをしてくれた。今野君はこの募集の最後の輸送の途中急死した。私はこの大きな犠牲にひどく胸が痛んだ」。¹¹⁶

おわりに

以上、朝鮮人労働者と佐渡鉱業所、三菱鉱業に関する史料を九種類紹介した。一次史料は三種類、二次史料は六種類である。私が見つけた一次史料はないため、研究者ならば容易に接することができるものばかりである。本稿は各所に点在する一次史料、二次史料を一つにまとめた史料紹介にとどまる。

最後に、今後の史料発掘の課題として三点をあげておく。

第一に、何よりも朝鮮人労働者の史料が必要である。先ずは平井栄一が『佐渡鉱山史』で作成に使用したと思われる「事業報告書」等の確認が急務である。また、本文でも述べたように、「場所長会議議事録」も重要である。佐渡鉱業所の副長、労務係は事

務職であり、他の鉱山や炭鉱と同様に、朝鮮人労働者については緻密で、膨大な文書を作成したと思われる。

第二に、朝鮮人労働者の強制連行に先立つ、近代における日本人労働者の研究が必要であり、関連史料の発掘が望まれる。部分的には磯部欣三、田中圭一の研究があるが、いまだまとまった研究はない。¹¹⁷先行する日本人労働者の実態が明らかにならないと、朝鮮人労働者との待遇面における違いを十分に把握できない。

第三に、三菱鉱業の場所（各地の鉱山、炭鉱）経営を結びつける具体的な史料の発掘が必要である。これまでの研究は朝鮮人労働者が従事した個別の事業所に集中していた面が強く、三菱鉱業本店が多くの事業所をどのように統括・管理していたかの具体的な研究はない。本稿は本店労務部の人間三名（平沢幹、伊藤保次郎、大槻文平）に注目したが、その一端にふれだけである。より全体像がわかる史料が必要である。

今後新たな史料を入手し、一定の分量に達したら、さらに続編として「史料紹介（2）」として公開する予定である。

〔付記〕

本稿は二〇二一年一〇月、第一回強制動員ZOOM講座（強制動員真相研究ネットワーク主催）で行った報告レジュメ「佐渡鉱山と朝鮮人労働者＋新史料」の一部を加筆修正したものである。

1 一九三九年七月に日本政府（平沼騏一郎首相）は「労務動員実施計画」を閣議決定し、この一環として同年九月から朝鮮人労働員を始めた。日本政府はこの時点から一九四五年八月まで、朝鮮人労務動員政策（募集、官斡旋、微用）を実施した。日本、韓国の学界ではこの三段階の動員政策を総称して、「強制連行」「強制動員」と呼ぶのが通説である。「募集」は一九三九

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（1）」（広瀬）

三八五

年九月から、「官幹旋」は一九四二年二月から、「微用」は一九四四年八月からである。以下、煩雑なので、カッコは省略する。
 全体像については、山田昭次・古庄正・樋口雄一『朝鮮人戦時労働動員』（岩波書店、二〇〇五年）、外村大『朝鮮人強制連行』（岩波書店、二〇一二年）参照。

史料には差別的用語があるが歴史性を重視するため、そのまま引用する。なお、（ ）内は広瀬が補った。

- 2 日本図書センター『帝国大学出身人名辞典』四卷（同社、二〇〇三年）一六九～一七〇頁。元史料は「学士名鑑」『帝国大学大観』（帝国大学学友会、一九三九年）。
- 3 加藤長吉「産金に就て」、司法省調査部『世態調査資料』第二〇号（一九三九年九月）一五頁。
- 4 前掲文章加藤長吉「産金に就て」二〇～二三頁。
- 5 前掲文章加藤長吉「産金に就て」二三～二四頁。
- 6 この史料は、キム・ミンチョル（金敏喆）「佐渡鉱山と朝鮮人強制動員に関する調査報告書」（強制動員真相究明ネットワーク、二〇二二年）が引用している。
- 7 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」一三頁。元史料は『特高月報』。
- 8 日本鉱山協会『平島人労務者二関スル調査報告』（同会、一九四〇年）、朴慶植編『朝鮮問題資料叢書』二卷（アジア問題研究所、一九八一年）七一～七六頁。
- 9 相川町史編纂委員会編『佐渡相川郷土史事典』（同町、二〇二〇年）全七四九頁。
- 10 平井栄一「石英粗面岩と新規金鉱脈に就いての考察」『日本鉱業会誌』五八巻六八七号（一九四二年七月）四二五～四三二頁。
- 11 平井栄一「鉱脈の形態概念と探鉱私見」『日本鉱業会誌』六四巻七二八号（一九四八年七月）三三七～三四〇号。
- 12 麓三郎の多くの著書の奥付等から作成した。

- 13 「あとがき」、三菱鉱業セメント株式会社総務部社史編纂室編『三菱鉱業社史』（同社、一九七六年）一〇八頁。
- 14 麓三郎『佐渡金銀山史話』（三菱金属鉱業、一九五六年）七頁。
- 15 「大場四千男教授 略歴・研究業績」『北海学園大学経営論集』一一卷三号（二〇一四年三月）i～v頁。
- 16 「平井栄二」（本間寅雄執筆）、前掲書『佐渡相川郷土史事典』五八六頁。
- 17 「佐渡鉱山史」（本間寅雄執筆）、前掲書『佐渡相川郷土史事典』三二八頁。
- 18 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」補注三〇、二五頁。
- 19 小風秀雅・余湖明彦「解題・『佐渡山史』の来歴と性格」『研究』一号（二〇一〇年三月）八五～八七頁。
- 20 西岡力「佐渡鉱山が朝鮮人強制労働の現場ではないことを示す一次史料・平井栄一編『佐渡鉱山史』」歴史認識問題研究会
(<http://harc.tokyo>)（二〇一二年一月三十一日）。
- 21 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」八頁。元史料は、佐渡鉱業所「半島労務管理ニ就テ」（昭和一八年六月）、『在
日朝鮮人史研究』一二号（一九八三年九月）九二頁。
- 22 『佐渡市版』八四八頁。
- 23 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」一〇頁。
- 24 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」二二頁。元史料は、佐渡鉱業所「半島労務管理ニ就テ」。
- 25 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」二二頁。元史料は『佐渡相川の歴史』六四八頁。
- 26 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」一五、一七頁。
- 27 佐渡鉱業所「半島労務ニ付テ」『在日朝鮮人史研究』一二号、九〇頁。
- 28 『研究会版』八四五頁。

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

- 29 佐渡鉱業所「半島労務ニ付テ」八八頁。
- 30 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」一五頁。元史料は佐渡鉱業所「半島労務管理ニ付テ」。
- 31 前掲論文キム・ミンチョル「佐渡鉱山と朝鮮人強制動員に関する調査報告書」一一～一四頁。
- 32 前掲論文広瀬貞三「佐渡鉱山と朝鮮人労働者」一三～一四頁。元史料は『特高月報』。
- 33 平井栄一『佐渡鉱山史』に対する史料的评价は、前掲論文竹内康人「佐渡鉱山朝鮮人強制労働、その否定論を問う」二～三頁で、同様な見解を述べている。
- 34 読みやすくするため、適宜、句読点を補った。原文は『佐渡市版』、『研究会版』を使用した。稿本に麓三郎が加筆修正したと思われる部分も含んでいる。この部分の活字版は『研究』五号、五六～五七頁参照。
- 35 『研究会版』+『佐渡市版』八四四～八四八頁。
- 36 高橋孝三郎「追憶」『浮選』一九七三巻五〇号（一九七三年七月）一二～一六頁。
- 37 中外産業調査会編『財閥三菱の新研究』（同社、一九三七年）一五四頁。
- 38 池田三郎「私の履歴書」、日本経済新聞社編『私の履歴書』一二巻（同社、一九六一年）一一～二〇頁。池田は一九三四年に日本タール工業（後に日本化成→三菱化成工業→三菱油化）の社長となる。池田には、上記以外に池田亀三郎追想録編集委員会編『追想池田亀三郎』（同会、一九七八年）がある。
- 39 麓三郎『三菱飯塚炭硯史』（三菱鉱業、一九六一年）一二〇頁。
- 40 小田正二「尾去沢の復興」、伊藤保彦・福井純一編『追想伊藤保次郎』（藤木出版、一九六八年）一六三頁。
- 41 大槻文平『私の履歴書』（日本経済評論社、一九七七年）七三頁。
- 42 前掲書麓三郎『三菱飯塚炭硯史』付表の二、三～五頁。

43 前掲文章 高橋孝三郎「追憶」一三頁。

44 前掲文章 高橋孝三郎「追憶」一四頁。

45 明石孝因「拡充用資材の配給は重点主義的に」、小野俊一編『鉱業生産拡充の諸方策』（工政会、一九四二年一月）七～八頁。
これは各産業の代表者級一三名が参加し、順番に一名ずつ語る方式である。

46 明石孝因「藍綬褒章を授賞して」『鉱山』一五巻四号（一九六二年四月）三六頁。適宜句読点を補った。

47 前掲書『チョン・ヘギョン報告書』八〇頁。

48 今後手がかりの一つになるのは、三菱鉱業の「場所長会議事録」である。石井里枝「戦時期における三菱財閥の経営組織——総務部課長打合会の検討を中心に」『経営総合科学』九九号（二〇一三年二月）（愛知大学経営総合科学研究所）一～二三頁は示唆に富む論文である。石井は一九四〇年八月一三日から一九四六年一月一七日まで、三菱本社が主催する系列会社の「総務部課長打合会」（以下、「打合会」とする）における、参加者氏名と「打合事項」を明らかにしている。「打合会」は月二回開催され、出席はほぼ義務化された。このような形で、三菱財閥としての全体的方向性がミドルクラスで確認されていたのである。

49 前掲書『帝国大学出身人名辞典』四巻、四四九頁。

50 左合藤三郎「縁は妙なるもの——労務三傑余誌」『エネルギー研究——石炭を中心に』九号（一九七七年二月）一一四～一一五頁。
左合は戦後に平沢が発起人だった元「日本労務管理年誌」編集委員。

51 内田星美「明治後期民間企業の技術者分布——大学・高工卒名簿に基づく統計的研究」『経営史学』一四巻二号（一九七九年一〇月）一～三〇頁。

52 前掲文章 左合藤三郎「縁は妙なるもの——労務三傑余誌」一一五頁。

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

- 53 前掲書『三菱鉱業社史』三〇三―三〇四頁。
- 54 「船田一雄氏略年譜」、船田一雄氏記念刊行会編『船田一雄』（同会、一九五三年）三六七―三八一頁。
- 55 前掲書『三菱鉱業社史』三〇四頁。
- 56 森田良雄『日本経営者団体発展史』（日刊労働通信社、一九五八年）五六―五七頁。
- 森田は東京帝大法科大学独法科を卒業。戦前に日本工業倶楽部調査課長、全産連書記長、大日本産業報国会中央本部勤労協議会事務室長、古河電工勤労部長を歴任し、戦後は関東経営者協会協力部長、日経連常務理事を務める。日本での企業団体、企業の労務管理部門に精通していた。
- 57 前掲書『帝国大学出身人名辞典』三卷、八四頁。元史料は『帝国大学出版名鑑』（校友調査会、一九三二年）。
- 氏家の戦前の著書として、『産業平和論―労務管理と労務者教育』（文雅堂書店、一九三三年）、『産業平和論』（文雅堂書店、一九三四年）、『戦時経済と産業人の使命』（南洋興発東京事務所、一九三八年）がある。
- 58 前掲書『帝国大学出身人名辞典』四卷、五一―八頁。
- 59 前掲書森田良雄『日本経営者団体発展史』一一九頁。
- 60 前掲書森田良雄『日本経営者団体発展史』九一―九三頁。
- 鉱業における労務管理の全体像は、間宏『日本労務管理史研究―経営家族主義の形成と発展』（御茶の水書房、一九七八年）の五章「鉱業における労務管理の変遷」を参照。
- 61 前掲書『船田一雄』八九―九一頁。
- 62 前掲書大槻文平『私の履歴書』四九―五〇頁。
- 平沢和重（一九〇九―一九七二）は一高を経て、一九三五年東京帝大法学部政治学科を卒業。外務省に入り、ニューヨーク

総領事館、大東亜省総務局総務課勤務を経て、一九四六年に退職。戦後は一九四九年からNHKラジオ解説委員（後にテレビ解説委員）を務め、一九五六年ジャパン・タイムズ主幹、一九六一年オリンピック東京大会組織委員会報道特別委員となる。主に外交評論家として活動する。福島慎太郎編『国際社会のなかの日本―平沢和重遺稿集』（日本放送出版協会、一九八〇年）がある。兄の平沢幹については何も語っていない。

63 前掲書『三菱鉱業社史』三〇四―三〇六頁。

64 前掲書森田良雄『日本経営者団体発展史』一七二頁。

65 「解説」、飛田雄一編・解説『特殊労働者の労務管理』（不二出版、復刻、一九九三年）二頁。元史料は「現代史を創る人びと

⑪ 戦前の労務管理 前田一」『エコノミスト』一九七〇年六月三〇日号。

北海道炭礦汽船（以下、北炭とする）の朝鮮人強制連行に関する史料は、林えいだい監修・責任編集『戦時外国人強制連行関係史料集』（明石書店、一九九一年）（以下、『関係史料集』とする）「Ⅲ・朝鮮人2中巻」参照。北炭の社史は、七〇年史編纂委員会編『七〇年史』（北海道炭礦汽船、一九五八年）がある。

66 「解説」、前掲書飛田雄一編・解説『特殊労働者の労務管理』一―七頁参照。

前田の戦前の著書として、次のものがある。『サラリーマン物語』（東洋経済出版部、一九二八年）、『サラリーマン物語・続』（東洋経済出版部、一九二八年）、『職業婦人物語』（東洋経済出版部、一九二九年）、『労使共存への途』（東洋経済出版部、一九三〇年）、『時局労働読本』（南郊社、一九三四年）、『新産業道読本』（全国産業団体連合会事務局、一九四一年）、編『磯村豊太郎伝』（同人、一九四二年）。

67 日経連創立十周年記念事業委員会編『十年の歩み』（同会、一九五八年）二四、二五九頁。

68 前掲書森田良雄『日本経営者団体発展史』二八七頁。

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（1）」（広瀬）

- 69 広瀬貞三「戦前の三池炭鉱と朝鮮人労働者」『福岡大学人文論叢』四八巻二号（二〇一六年九月）七三〇～七三三頁。
- 70 岩崎家伝記刊行会編『岩崎小彌太伝』（東京大学出版会、復刻、一九七九年）一九八～二〇一頁。
- 71 労務管理史編纂会事務局『労務管理史料解題』（中間報告・第二輯）（同局、一九五八年）。
- 72 左合藤三郎『日本労務管理年誌』の編集過程を顧みて『エネルギー史研究—石炭を中心に』三号（一九七四年五月）七五～八四頁。左合は日本産業協力連盟の職員だった。
- 73 野間恭一郎（一八八九～一九三七）は一九一三年に東京帝大法科大学独法科を卒業し、三菱合資会社銀行部に入社する。一九三六年六月に三菱商事取締役総務部長に就任するが、四九歳で急逝する。
- 74 平澤幹「労務問題について」（一九二〇年か）、前掲書『三菱鉱業社史』三〇四頁から再引用。原文は未確認。
- 75 平沢幹「労働移動に就て—鉱夫移動問題—」『日本鉱業新聞』四六七号（一九三三年四月）一〇～四七頁。
- 76 平沢幹「労働問題黎明期に於ける思ひ出」、前掲書『船田一雄』二七三～二七四頁。
- 77 平沢幹「労務の道友」、前掲書『追想伊藤保次郎』二四五～二四六頁。
- 78 三菱美唄炭労働組合『炭鉱に生きる—炭鉱労働者の生活史』（岩波書店、一九六〇年）i～iii頁。
- 79 前掲書『三菱鉱業社史』二一八～二二一、四一七～四二〇頁。一九一八年時点における美唄炭鉱については、『三菱鉱業株式会社美唄炭鉱概要』（大正七年）参照。前掲書『関係史料集』「Ⅲ・朝鮮人2・上巻」所収。
- 80 前掲書大槻文平『私の履歴書』五三頁。
- 81 白戸仁康「第二次世界大戦期における美唄の炭鉱—朝鮮人強制連行問題を中心として」、前掲書『関係史料集』「Ⅲ・朝鮮人2・上巻」三八頁。元史料は、『北海道炭鉱統計資料集成』である。美唄炭鉱における朝鮮人強制連行の史料は、前掲書『関係史料集』「Ⅲ・朝鮮人2・上巻」に所収。

- 82 前掲書『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』八六頁。
- 83 前掲書『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』九〇―九一頁。
- 84 前掲書『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』九九―一〇〇頁。
- 85 前掲書『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』一〇三頁。
- 86 前掲書『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』一〇六頁。
- 87 前掲書『炭鉱に生きる―炭鉱労働者の生活史』一三四―一三五頁。
- 88 伊藤保次郎「私の履歴書」、日本経済新聞社編『私の履歴書』一〇集（同社、一九六七年）七九頁。
- 89 前掲文章伊藤保次郎「私の履歴書」八七頁。
- 90 早川勝「全人格に対する信頼と親愛」、前掲書『追想伊藤保次郎』一八九頁。
- 91 麓三郎「先立し人を慕いて」、前掲書『追想伊藤保次郎』二七二頁。
- 92 前掲文章伊藤保次郎「私の履歴書」九五頁。
- 93 経歴については、「伊藤保次郎年譜」、前掲書『追想伊藤保次郎』六―九頁。
- 94 前掲書『追想伊藤保次郎』（藤木出版、一九七三年）。
- 95 伊藤保次郎「船田おっさんの想い出」、前掲書『船田一雄』二七八―二八三頁。
- 96 伊藤保次郎「藍綬褒章受章感想」『鉱山』一六五号（一九六二年四月）二四頁。
- 97 伊藤保次郎「私の履歴書」八七―八八頁。
- 98 前掲書大槻文平『私の履歴書』九五頁。
- 99 白川義正「わが師大槻さんを偲ぶ」、「追想大槻文平」編集委員会編『追想大槻文平』（三菱マテリアル、一九九三年）八二―

資料紹介「朝鮮人労働者と佐渡鉱山、三菱鉱業の史料（一）」（広瀬）

100 野崎二夫「大槻先輩を憶う」、前掲書『追想大槻文平』一一三頁。

101 大槻文平編著『私の三菱昭和史』（東洋経済新報社、一九八七年）二〇～二二頁。

102 石堂忠右衛門「朝鮮人労働者募集誌」、前掲書『関係史料集』「Ⅳ―中国人・朝鮮人・オランダ人・イギリス人」五〇七～五五〇頁。朝鮮人労働者については、「三三直島製煉所」前掲書『調査報告』一二三～一三〇頁。浄土卓也『朝鮮人の強制連

行と徴用―香川県・三菱直島製煉所と軍事施設』（社会評論社、一九九二年）参照。

103 「大槻文平年譜」、前掲書『追想大槻文平』頁数なし。前掲書大槻文平『私の履歴書』七三～七四頁。

104 竹内康人『調査・朝鮮人強制労働①炭鉱編』（社会評論社、二〇一八年）四〇～四八頁。

105 前掲論文白戸仁康「第二次世界大戦期における美唄の炭鉱―朝鮮人強制連行問題を中心として」、前掲書『関係史料集』「Ⅲ・朝鮮人2・上巻」一～六九頁。炭鉱を中心とする美唄市の歴史は、白戸仁康『美唄由来雑記』（美唄市、二〇〇一年）参照。

三菱美唄炭鉱に強制連行された朝鮮人二名の証言と現場写真等は、日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会編『写真で見る強制動員の話―日本・北海道編』（日本語版）（韓国・日帝強制動員被害者支援財団、二〇二〇年）五八～七一頁。

北海道における朝鮮人強制連行については、朝鮮人強制連行調査団編著『朝鮮人強制連行強制労働の記録―北海道・千島・樺太篇』（現代出版会、一九七四年）、松本正徳『日本労務管理史―北海道の炭鉱の事例を中心』（中央大学出版会、一九九九年）、朝鮮人強制連行実態調査報告書編集委員会・札幌学院大学北海道委託調査報告書編集室編『北海道と朝鮮人労働者―朝鮮人強制連行実態調査報告書』（札幌学院大学学生生活協同組合、一九九九年）参照。

菅浦一「人の情け」、前掲書『追想大槻文平』三二七頁。

106 「大槻文平年譜」、前掲書『追想大槻文平』頁数なし。

107 「大槻文平年譜」、前掲書『追想大槻文平』頁数なし。

- 108 「弔辞」、前掲書『追想大槻文平』三〇九頁。
- 109 「池田さんのこと」、前掲書『追想池田亀三郎』二七頁。
- 110 前掲書大槻文平編著『私の三菱昭和史』一三〇一五頁。
- 111 大槻文平「北海道に於ける朝鮮人鉱夫問題（上）」『社会政策時報』一二二号（一九三〇年一〇月）八七頁。協調会は一九一九年一二月に設立され（会長・徳川家達）、労使の協調と社会政策の調査研究、及びその実行が二大目的だった。この機関紙が『社会政策時報』である。詳細は、菅谷章「復刻版解題」、協調会編『社会政策時報』合本二一（原書房、一九八一年）六七三〇六八一頁参照。
- 112 大槻文平「北海道に於ける朝鮮人鉱夫問題（下）」『社会政策時報』一二二号（一九三〇年一二月）一三一〇一三三頁。大槻の二つの論文は、前掲書『関係史料集』Ⅲ・朝鮮人2・上巻」にも所収。
- 113 大槻文平「業界への功績」、前掲書『追想伊藤保次郎』二五一頁。
- 114 前掲書大槻文平編著『私の三菱昭和史』一六頁。
- 115 前掲書大槻文平『私の履歴書』五三〇五四頁。大槻の論文は、「北海道に於ける朝鮮人鉱夫問題」『社会調査時報』一二二号（一九三〇年一〇月）八七〇一〇五頁、同一二二号（一九三〇年一二月）八七〇一〇八頁。
- 116 前掲書大槻文平『私の履歴書』七二〇七四頁。
- 117 磯部欣三「佐渡金（銀）山の労働力―主要な供給地に関する考察」、地方史研究協議会編『佐渡―島社会の形成と文化』（雄山閣、一九七七年）、同『佐渡金山』（中央公論社、一九九二年）、田中圭一「島の自叙伝」（静山社、一九八二年）。